

高知空港周辺整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

—南国市田村・前浜・大塙地区の調査—

1985.3

高知県南国市教育委員会

序

高知平野の中心部にあたる田村遺跡は、かつて銅鋒や銅鉢が発見されており、また出土した弥生前期前半の数多くの土器の中には底部に切痕の残っているものもあり、土佐における稻作発祥の地であります。

田村遺跡は昭和30年、昭和38年、昭和51年と発掘調査が行われてきましたが、昭和49年に「銅鋒の舌」が発見され、その字名から「田村西見当遺跡」として全国的にも重要な遺跡として評価を受けるところとなりました。

昭和54年度より高知空港拡張整備事業が行われることとなり、それに伴う発掘調査が高知県教育委員会の手で行われたところ、広範囲に亘って弥生前期から中世に至る遺構を確認することができ、甚大な数の貴重な遺物も出土しました。また空港拡張に伴ない昭和56年度から空港周辺整備事業として、農道改良、水路改修工事が実施されているところであります。

そのため、周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の必要にせまられ、昭和57年度は10月28日～12月6日まで、昭和58年度は10月12日～11月2日にかけて発掘調査を行いました。その結果、出土品として弥生土器片・石鏡、石包丁等の石器及び遺構が発見されました。こうした遺構は記録として保存し、出土品とともに次代に継承し考古資料として活用されることを念じます。

終りにのぞみ、この発掘調査から報告書の作製にいたるまで、特にご繁忙の中をご教示、ご尽力いただきました高知女子大・岡本健児教授、高知県教育委員会文化振興課・宅間一之社会教育主事、山本哲也主事、出原恵三主事、並びに高知県教育委員会文化振興課南国調査連絡所の皆様、この発掘にご協力くださいました関係者の方々に厚くお礼を申しあげます。

本報告書が、埋蔵文化財保護と活用に役立てれば幸いです。

昭和 60 年 3 月 30 日

南国市教育委員会

教育長 鈴江廣幸

例　　言

1. 本書は、南国市教育委員会が実施した高知空港周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 調査は昭和57年・58年度二ヶ年にわたって行なわれたが、本書はその二ヶ年分を一括掲載することとした。
3. 調査・報告書の作成にあたっては、岡本健児高知女子大学教授の指導をうけ、高知県教育委員会の協力を得て実施した。
4. 本書の執筆は、宅間一之(Ⅰ)山本哲也(Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ)、出原恵三(Ⅳ)が行なった。遺物の整理実測には出原恵三があり、西野貴美、中村純の協力も得た。写真は宅間・山本・出原が撮影した。編集は南国市教育委員会が行った。
5. 発掘調査にあたっては、発掘区周辺土地所有者には特別の配慮をいただき、地元作業員の方々には多くの協力も得た。また測量には企画財政課空港運輸係の援助もいただいた、ここに深甚の謝意を表すものである。

本文目次

I 調査にいたる経過	1
II 調査の経過	3
III 各地区の調査概要	6
1. 前浜(司例田)地区的調査	6
2. 田村(尾中)地区的調査	6
3. 田村(北カリヤ)地区的調査	7
4. 田村(荒堀)地区的調査	8
5. 田村(神母ノ木・青木・徳蔵ノ後口)	11
6. 前浜(三ノ戸「曾根」)地区的調査	11
7. 田村(高城)地区的調査	11
8. 前浜(三ノ戸)地区的調査	14
9. 大堀(町田・外場戸・防ノ城分)地区的調査	15
IV 出土遺物	16
V まとめ	24

図面目次

第1図 調査地位置図	区・調査区設定状況図
第2図 前浜(司例田)地区・調査区設定状況図 土層序(東壁)	第15図 前浜(三ノ戸「曾根」)地区・調査区位 置図
第3図 田村(尾中)地区・調査区平面図・土層 序	第16図 田村(高城)地区・調査区設定状況図・ 土層序
第4図 田村(北カリヤ)地区・周辺地形実測図・ 土層序	第17図 田村(高城)地区・遺構平面図・SK- 02断面図
第5図 田村(北カリヤ)地区・調査区設定状況 図・遺構検出図	第18図 前浜(三ノ戸)地区・調査区設定状況図・ 遺構検出図(千屋城跡北側)
第6図 田村(北カリヤ)地区・遺構平面図 (SK-03・ST01)	第19図 前浜(三ノ戸)地区・土層序・集石遺構 平面図
第7図 田村(北カリヤ)地区・SK-01	第20図 大塙地区・調査区設定状況図
第8図 田村(荒掘)地区・調査区設定状況図・ 遺構検出図	第21図 亦生土器実測図1
第9図 田村(荒掘)地区・遺構平面図	第22図 " 2
第10図 " "	第23図 " 3
第11図 " "・土層序	第24図 " 4
第12図 " "・ST-02遺物出土状 況図	第25図 亦生土器・土師器・須恵器・土師質土器・ 唐津実測図
第13図 田村(荒掘)地区・ST-01平面図	第26図 石器実測図1
第14図 田村(神母ノ木・青木・徳蔵ノ後口)地	第27図 " 2

図版目次

PL 1 前浜(司例田)地区	PL 8 田村(北カリヤ)地区
PL 2 "	PL 9 "
PL 3 "	PL 10 " (荒掘)地区
PL 4 "	PL 11 " "
PL 5 田村(尾中)地区	PL 12 " "
PL 6 " (北カリヤ)地区	PL 13 " "
PL 7 " "	PL 14 " "

P L 15	田村(荒堀)地区	P L 42	"	"
P L 16	" "	P L 43	"	"
P L 17	" "	P L 44	"	"
P L 18	" "	P L 45	"	"
P L 19	" "	P L 46	前浜(三ノ戸)地区	
P L 20	" "	P L 47	"	"
P L 21	" "	P L 48	"	"
P L 22	田村(神母ノ木・青木)地区	P L 49	"	" · TR-4, 黄茶色 粘砾層出土遺物
P L 23	" "	P L 50	前浜(三ノ戸)地区・南北トレンチ北側 黄茶色粘砾層出土遺物	
P L 24	田村(青木・櫛藏ノ後口)地区	P L 51	田村(高城)地区・出土遺物	
P L 25	前浜(司例田)地区・トレンチ内出土遺 物	P L 52	大堀(町田・外堀戸・防ノ城戸)地区	
P L 26	田村(尾中)地区・遺構面直上出土遺物・ 弥生土器	P L 53	田村(尾中・北カリヤ・荒堀)出土土器	
P L 27	田村(北カリヤ)地区・SK-03, 耕作 土出土遺物・石臼片・須恵器	P L 54	"	"
P L 28	田村(北カリヤ)地区・SK-01出土遺 物・弥生土器・石器(石鋸片・円形叩石・ サヌカイト片)	P L 55	"	"
P L 29	田村(北カリヤ)地区・出土遺物	P L 56	"	"
P L 30	" "	P L 57	田村(北カリヤ・高城・荒堀・尾中)出 土土器	
P L 31	田村(北カリヤ)地区・ST-01出土遺 物	P L 58	田村(尾中・北カリヤ・荒堀)出土土器	
P L 32	田村(荒堀)地区・出土遺物	P L 59	"	"
P L 33	" "	P L 60	"	"
P L 34	" "	P L 61	"	"
P L 35	" " ST-02出土遺物			
P L 36	" " 出土遺物			
P L 37	前浜(三ノ戸・「曾根」)地区			
P L 38	" "			
P L 39	" "			
P L 40	田村(高城)地区			
P L 41	" "			

I 調査にいたる経過

高知空港拡張整備事業は、南国市田村地区の空港本体部分を中心としてその周辺も含め昭和53年度から実施された。本体部分については、高知県教育委員会が運輸省第三港湾建設局の委託を受けて実施し、周辺の整備事業は、県の補助を受け、南国市企画財政課が事業主体となって実施したものである。

周辺整備事業対象地は、国道55号線以南、県道後免里改田線以東、物部川以西そして南は太平洋に至る範囲で、高知空港の拡張に伴い失なわれた農地の有効利用を図るために営農対策を目的として農道・用排水路等の整備を中心とした工事内容である。

東西3.2キロ、南北3.5キロの広範な地域であり、物部川によって形成された扇状地香長平野の南部全域にわたり、南四国中央部における弥生文化発祥の地である。すでに西見当遺跡の発掘調査や、空港本体工事区域の田村遺跡群の発掘調査によって、弥生前期前半から後期中葉まで弥生文化が連続し発展した過程が確認された地域である。

また中世においては、管領細川氏の守護代として上田村莊に赴任した細川頼益らによって築かれた居館は土佐最大の規模を誇っていたことが現状地形からも把握でき、その周辺には溝に囲まれた家臣のものと思われる屋敷跡も数多く発掘された。中世守護代の居館周辺や中世村落の景観も上田村を中心に次第に復元を可能としつつある。工事対象地内にはこれらの弥生から近世にかけて多くの遺跡が点在し、すでに21ヶ所におよぶ周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれている。

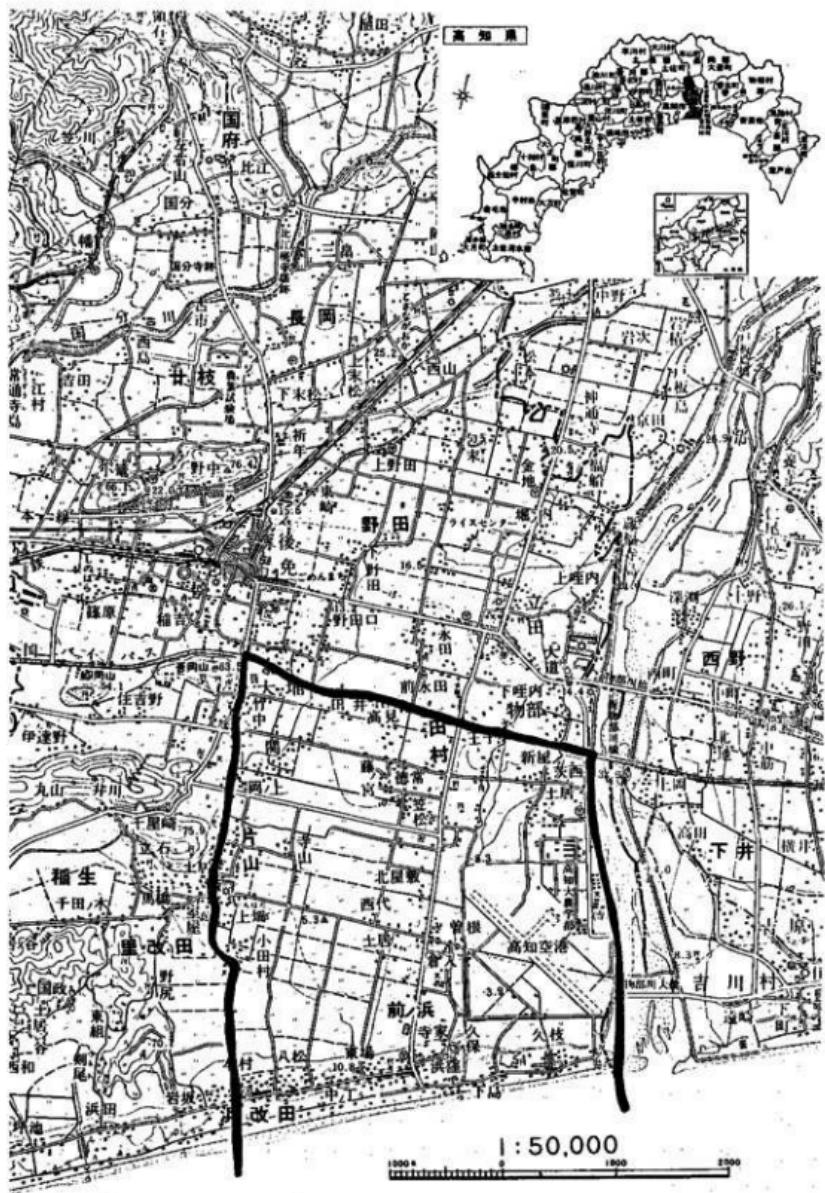
工事は原則として現況の改修であるが一部拡幅の計画もあった。工事は常に住民の要求を優先して立案されるため、埋蔵文化財包蔵地及びその周辺に及ぶこともあった。このため南国市教育委員会は、企画財政課空港運輸係と協議し調整をはかってきたが止むを得ず記録保存の処置を講じなければならぬ地点もあった。

調査は計画区域全域にわたる踏査から開始し、工事の内容と包蔵地との関係や状況を把握して調査の必要な地域、立会及びパトロールを実施し状況に応じて対応する地域、試掘調査等も含めて発掘調査が必要な地点の三ランクに区分して対応した。

これらの事前踏査に基づく結果に従って、発掘調査が必要と考えられる地点については、工事の本格化する昭和56年度から着手することとした。

昭和57年9月25日、南国市教育長は、前浜（司例田）田村（尾中・北カリヤ・荒堀・神母ノ木・青木・徳蔵・後口）の発掘届を提出した。調査は高知県教育委員会文化振興課の協力を得て10月28日から開始し、12月6日に終了した。工事区域内のみの調査は、狭長な調査区となり、かつ周囲は全て私有地であるため排土処理についても苦慮しつつの調査であった。

昭和58年9月30日には、昭和58年度の工事区間に係る大塙・田村（高城）、前浜（三ノ戸）地区的発掘届が提出され、10月12日から11月2日にかけて発掘調査を実施した。用排水路区間の調査は用排水不用の時期に、発掘調査と工事の完了が必要という制限された期間の調査であり、その調整に頭を痛めた調査であった。



調査対象地 及び周辺図

II 調査の経過

前浜（司例田）地区の調査

発掘調査は、1982年10月28日～10月30日の間に実施した。調査にあたり、工事計画（水路・農道拡幅・前浜1番2工区）の範囲に計11ヶ所のトレンチ（TR 1～TR 11）を設定し、確認調査を行った。調査は、人力により耕土と床土を除去した後、層序に従って遺構の確認作業を行い、また状況に応じてトレンチ内に、部分的に小トレンチを設けた。各トレンチでは、遺構及び遺物包含層は何ら検出されず、わずかにTR 7・9・10・11において若干の遺物が採集されただけであった。

田村（尾中）地区の調査

発掘調査は、1982年11月1日～11月5日の間に実施した。調査対象地は、耕作土除去後に盛り土工事が行われることから、重機（ユンボ）による耕作土除去作業について立会調査を実施し、約127m²の範囲を調査した。調査区では、耕作土直下で遺物包含層上面または遺構検出面となっており、包含層上面の精査及び遺構検出状況平面図の作成を行った後、埋め戻し作業を実施した。

田村（北カリヤ）地区調査

発掘調査は、1982年11月18日～11月22日の間に実施した。調査は、工事計画範囲（道路及び水路改修・3号道水路）の全域にわたって調査区を設定し、遺構検出作業を行った。調査区において検出された磚層部分については、さらに部分的な試掘溝を設けて、補足調査を実施した。

田村（荒堀）地区の調査

発掘調査は、1982年11月22日～12月8日の間に実施した。調査区を工事計画範囲（1号道水路）に設定し、全面発掘を実施した。調査区では、耕作土直下で遺構検出面となっており、調査範囲の全域にわたって遺構形成が認められた。なお、ST-02の検出に伴い、地権者の協力を得て、調査区の一部を拡張し、ST-02全体の調査を実施した。

田村（神母ノ木・青木・徳蔵ノ後口）地区の調査

発掘調査は、1982年12月3日～12月6日の間に実施した。工事計画（農道拡幅・水路設置・田村10番・15番工区）の範囲に、6ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施した。各トレンチでは、明確な遺構及び遺物包含層は検出されず、一部のトレンチにおいて、不鮮明なピット状の落ち込みが確認されただけであった。

前浜（三ノ戸・「曾根」）地区の調査

発掘調査は、1983年10月12日に実施した。工事計画（農道整備・水路設置・前浜8番工区）の範囲

にトレンチを設定し、調査を実施したが、遺構及び遺物包含層は、検出されなかった。

田村（高城）地区の調査

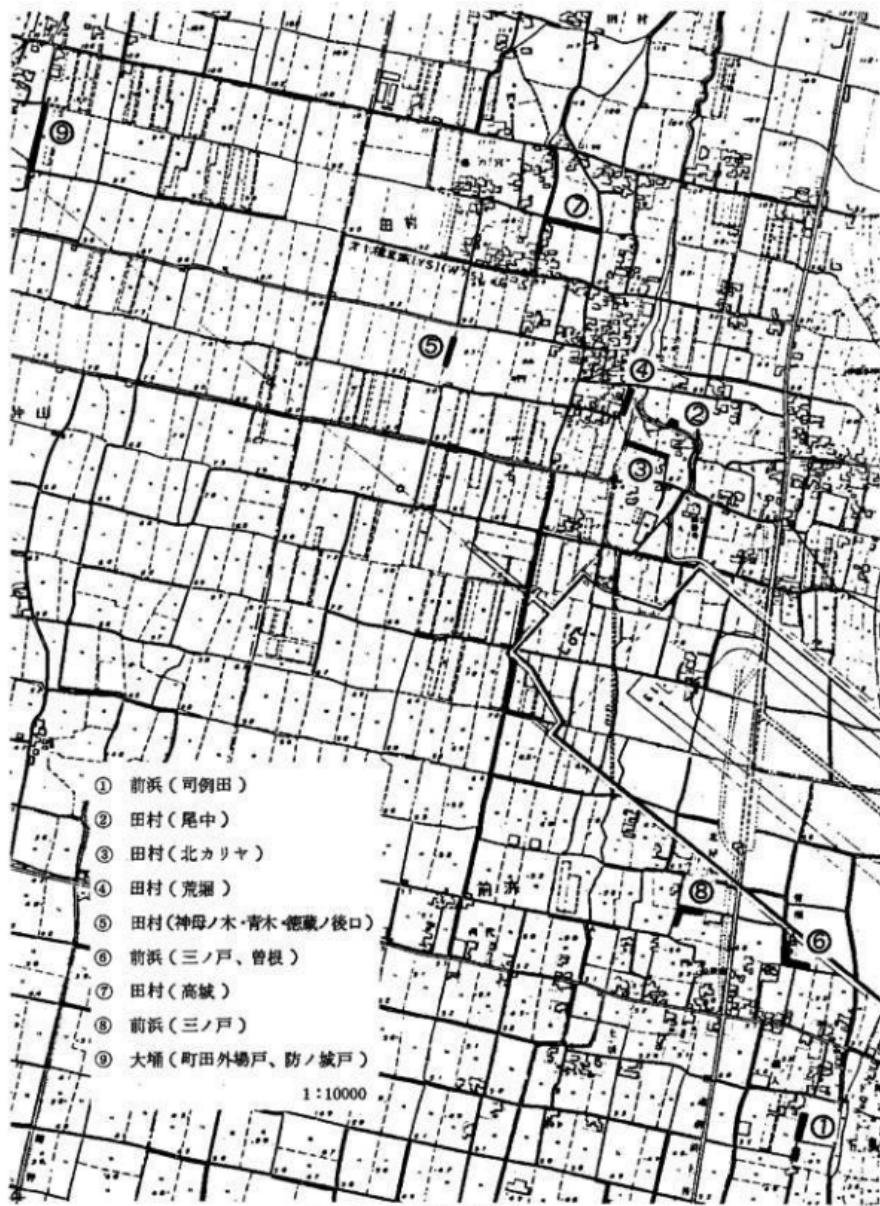
発掘調査は、1983年10月12日～10月22日の間に実施した。工事計画範囲（農道整備・水路設置・田村4番工区）に調査区を設定し、遺構検出作業に努めた。調査区は、農道に接して東西に細長いトレンチであるが、調査の便宜上農道を境として、北側のトレンチを「北トレンチ」、南側を「南トレンチ」と呼称することとした。南トレンチでは、耕作土直下が遺構検出面（地山層上）であったが、北トレンチにおいては特にトレンチ東側部分において数時期にわたる遺構形成面が認められた。

前浜（三ノ戸）地区の調査

発掘調査は、1983年10月25日～10月29日の間に実施した。調査では、工事計画範囲（農道整備・水路設置・前浜9番工区）に5ヶ所のトレンチを設定し確認作業を実施したが、トレンチの一部に設けた試掘溝において壠状遺構が検出されたため、各トレンチ内に計12ヶ所の小トレンチ（TR1～TR12）を設けて、遺構確認に努めた。

大塙（町田・外場戸・防ノ城戸）地区の調査

発掘調査は、1983年10月31日～11月2日の間に実施した。調査では、工事計画範囲（農道拡幅・水路設置・大塙1番工区）に計3ヶ所のトレンチを設定し調査を実施したが、TR1において溝状及びピット状の落ち込みが認められただけで、他に明確な遺構は検出されなかった。



第1図 調査地位置図

III 各地区の調査概要

1. 前浜(司例田)地区の調査

調査地点は、南国市前浜字司例田における標高4.40m～4.50mの水田地及び畠地である。(第2図)調査区周辺には、北側に民家が南側には太平洋戦争下に造られた飛行機用の掩体が所在する。各トレーナー(TR 1～TR 11)の調査内容からは、遺構及び遺物包含層の形成は認められず、TR 7(耕作土及び黄褐色粘質層)・TR 9(耕作土及び黄褐色粘質層)・TR 10(灰茶色粘質層及び灰色カク乱層)・TR 11(灰茶色粘質層)において、須恵器・土師器・近世陶磁器等の細片が採集された。(PL. 25)

調査区の層序は、TR 1～4・6・8・9において第3層黒褐色粘質層が認められ、第3層がTR 4南側及びTR 5・7で途切れるもの、TR 1～TR 9にかけて連続的に堆積している状況がうかがわれた。TR 8における第3層下層及び第4層上面では、一部でピット状の落ち込みがみられたが、人為的な形成によるもの(遺構)であるとは判断されなかった。(第2図、PL. 1)

2. 田村(尾中)地区の調査

調査地点は、南国市田村字尾中であり(田村尾中乙 961-2・961-9・962・963番地)，調査時周辺は標高8.20m～8.30mを測る水田地であった。調査は、調査区西側で遺物包含層上面の精査を、東側で遺構の確認作業を実施した。(第3図、PL. 5)

調査区の層序は、表土下4層に区分される。第1層は表土で暗灰茶色粘質層・第2層は耕作土で淡灰茶色粘質層・第3層は黄茶褐色粘質層で遺物包含層であり、第4層は無遺物層で黄褐色粘質層となっており、遺構検出面である。遺物包含層は、調査区の西側において厚さ12cm以上で堆積しており、多量の弥生土器片を包含している。調査区東側では、第2層下で、第4層の地山層となつており、第3層は認められない。本来は堆積していたものが、耕作等により消失したものと考えられるが、調査区東側における第2層中では、遺物の出土は土器片が數片混入しているだけであった。遺物包含層の上面の精査では、多量の弥生土器片及び石器の出土があったが、第1層及び第2層の除去作業に伴って第3層から遊離した遺物だけを採集することにとどめた。

遺構については径10～20cmのピットが計14個、50×60cmの楕円状の土壙が1基・幅30～40cm長さ1.9mの溝状遺構及び幅70～80cm長さ1.6m以上の溝状遺構の存在が確認されたが、遺構内調査は実施せず、確認作業後検出面上で盛り土による埋め戻し作業を行った。時期及び性格については、調査の性格上明確にすることはできなかったが、調査区西側の遺物包含層に伴う弥生時代中期を主とした遺構であるものと考えられる。なお、遺構の埋土はいずれも茶褐色粘質層であった。

調査区の北西で、尾中地区の北側において行われた小規模水路設置に伴う立会調査(4号用水路・1982年11月25日調査)では、遺物が採集され遺物包含層の存在が認められた。(PL. 26)尾中地区においては、全城にわたって弥生時代の遺構及び遺物包含層が存在する可能性が強い。

3. 田村(北カリヤ)地区の調査

調査地点は、南国市田村字北カリヤ(田村北刈谷乙732-1・738-1・745番地)であり、周辺は、標高8.35m~8.45mを測る水田地及び畑地である。調査区は東西に細長いトレンチであり、調査区東側には藏福寺が所在する。(第5図)調査区では、中央部及び東側部が耕作土直下で灰茶色砂礫層及び褐色礫層となっていて、遺構の検出が認められないものに対し、その他の部分ではほぼ調査区全体に遺構形成が認められた。検出遺構は、遺構の種別に応じて分類し、それぞれ番号を冠した。ST-01の西側では遺構の形成は認められず、地山層である淡黄褐色粘質層の広がりが確認された。検出された遺構は、ビット34個・土壤5基(このうちSK-03は近世墓)・不整形土壤1基(SX-01)・溝1条(SD-01)・堅穴住居址1棟(ST-01)である。

層序

調査区の層序は、調査区西端・中央部・東端においてそれぞれ異なっており、中央部及び東側部で調査区を縱断する形で2ヶ所の自然流路(灰茶色砂礫層・褐色礫層)が認められた。遺構検出面は、淡黄褐色粘質層上であり、ST-01周辺では黄褐色粘質層及び茶褐色粘質層において弥生土器片の包含が認められたが、SK-05・SK-03・SD-01の周辺では耕作土直下で淡黄褐色粘質層が検出され、遺構検出面となっていた。遺構内埋土は、SK-03における耕作土類似の灰色粘質層を除いて他は、ST-01堆積層である茶褐色粘質層に類似の土層であった。なお、耕作土中からは、調査区中央部以東において古墳時代~奈良時代に属する須恵器片が採集された。(PL-27)

遺構

ST-01

調査区西側において検出された径2.4m以上の堅穴住居址である。住居址の約半分以下の検出があり、現状では不整形な形状を呈していて、全体では北に延びて楕円形状を呈する形状となる可能性を有する。住居址内では、32×46cmの範囲で円形状の掘り込み(深さ6cm、黒褐色粘質層が堆積)が認められた以外は、柱穴等は検出されず、住居址床面から上へ4~10cmの間隔を有して、磨製石斧、弥生土器片(PL-31)が出土した。ST-01の履土である、第3層茶褐色粘質層の上部では、弥生土器片及び扁平叩石が出土しているが、第3層をST-01検出面に接して分層区分することはできなかった。ST-01の壁高は、東側で約28cm・西側で約10cmを測り、全体的に南側から東南部にかけて高くなっていた。

SK-03

調査区中央部において検出された近世墓である。墓壙内には河原石の集石が認められ、集石中に半裁された白石片(PL-27)が転用して置かれていた。墓壙は、方形の掘方によるが、一部分の検出であり、一辺1.5mを測るにとどまる。深さは約20cm前後で、遺物等は認められなかった。SK-03南掘方部では、掘方肩部に接してビットが認められ、また、SK-03内においてもビットの存在があ

った。

S D -01

調査区東側において検出された溝状遺構である。南北方向で幅 0.7m～0.9m, 深さ 9～17cmを測る。遺構内では、P 4 が認められるが、出土遺物はなかった。

S X -01

S D -01の西側に接して検出された不整形土壌であり、幅 1.6m, 深さ 30cmを測る。弥生土器片・石器剝片が出土した。

S X -02

S K -03の東南部において検出された土壌であり、深さ約 26cm である。弥生土器片が出土した。

S K -01

調査区東端で検出された土壌であり、梢円状を呈する。幅 42×67cm, 深さ 28cmを測り、土壌東側部は 2段の段状をなす。石礫・円形叩石・サメカイ及びチャート剝片・弥生土器片が出土した。

S K -02

幅 20cm, 長さ 30cm以上, 深さ 31cm の土壌である。石器剝片・弥生土器片が出土した。

S K -04

幅 40cm, 長さ 70cm の梢円状の土壌である。深さ 33cmを測り、弥生土器片・石器剝片が出土した。

S K -05

幅 52cm, 長さ 1.4m 以上で長方形をなす土壌である。深さ 3～6cm で、形状から土壌墓の可能性もあるが明確ではない。

P 1～34

ピットは、計 34 個確認された。P 4・18・22・28・31 からは、弥生土器片が出土したが、その他のピットでは遺物の出土は総じて少なく、細片の土器片出土にとどまる。ピットの形状は、円形又は梢円形であり、調査範囲において散在して形成されていて、遺構検出の状況からはその性格を明確にすることはできなかった。ピットのなかには、切合い関係を有するものもあり、2～3 時期にわたる遺構形成が考えられる。全体的に、幅 10～20cm 深さ 6～30cm の範囲に収まる。

4. 田村（荒掘）地区の調査

調査地点は、南国市田村字荒掘（田村荒掘 2,973・977 番地）である。周辺は、標高 8.60m 前後の畠地で、工事範囲（1号道水路）に、南北に細長いトレーナーを設定した。調査区の西側は、道路及び水路を隔てて民家が所在し、東側は畠地となっている。遺構は、調査区全面で確認された。検出遺構は、堅穴住居址 1 栋（S T -02）、堅穴状遺構 1（S T -01）、溝 2 条（S D -01～02）、土壌 10（S K -01～10）、不整形土壌 5 基（S X -01～05）、ピット 65 個（P 1～65）、掘立柱建物址 3 栋（S B -01～03）である。遺構からは、弥生時代前期～中期に属する土器及び石器が、また奈良時代末～平安時代前半に属する土器が出土しており、大別して弥生時代と奈良～平安時代における遺構形成が認められた。遺構内堆積土は、主として褐色粘質土であり、一部の遺構（S T -02 上）では、淡

茶灰色粘質土(第2層)であった。(第8図, PL10)

層序

調査区の層序は、基本的に3層に区分される。第1層は耕作土で暗灰色粘質土・第2層は淡茶灰色粘質土、第3層は黄褐色粘質土で地山層となっている。遺構検出面は、第3層上面であり、調査区北側と南側では比高差約18cmを測って、南側が高くなっている。第2層の堆積は、調査区北側で10~16cmの厚みを持つが、南側では2~6cmで堆積は薄い。第2層は、第1層耕作土と同質の軟質の堆積層であり、表土から遺構検出面までには、特定時期の遺物包含層はみられなかった。

遺構

ST-01

調査区北端で検出された堅穴状遺構である。一部分の検出であり、不明確な内容ではあるが、遺構内には2個の柱穴状ビットを有することから、堅穴住居址の可能性がある。埋土中からは、弥生土器片とともに、土師器及び須恵器片が数点出土しており、遺構の形成時期は、奈良末~平安時代前半に属するものと考えられる。遺構の壁高は24~30cmで、柱穴状ビットは、遺構底面から7~8cmの深さで掘削されている。

ST-02

調査区南側で確認された、円形の堅穴住居址である。直径3.54m×3.30mを測り、中央部に炉跡を有する。遺構内には、計24個のビットがみられるが、このうち方形及び円形ビットのなかには、住居址検出面上でビットの存在が確認されたもの及び第2層淡茶灰色粘質土が堆積しているもの(第13図A~I)があり、ST-02施設以降に形成されたと判断されるビットが存在する。特に、ST-02の東端では、住居址壁面を壊して形成されたビットがみられ、切合い関係を有している。

住居址の壁高は、最高27cm・最低6cmを測る。柱穴は径12cm~24cmの範囲であり、一部で住居址壁面に接して形成されている。ST-02南西部の床周縁に沿って段状遺構がみられる。また、住居址中央部では、1m×1.7mの範囲で炭化物の集中が認められ、厚さ5~6cmで堆積している。(第12図)炉跡は、炭化物集中範囲の下部で検出され、直径72×50cm深さ23~30cmを測る。(PL21)

遺物は、住居址床面から3~8cmの高さで出土した。(第12図1~16)(PL20)弥生土器片及び石器(円形叩石)であり、遺物のなかで、円形叩石の多さが注目される。

SD-01

調査区北側で検出された東西方向の溝である。幅26cm長さ1m以上を測り、深さは19cmである。溝底部から、弥生土器口縁部片が出土した。

SD-02

調査区南側で検出の東西方向の溝である。幅34cm長さ94cm以上深さ23cmであり、溝底から、弥生土器片(高杯口縁部)が出土した。検出状況から、西側に延びる溝と考えられる。

S K -01~10

梢円又は円形を呈する土壙である。SK-01・04・05は遺構の一部の検出で、SK-03・06・08・09では他の遺構（柱穴・ピット）との切合い関係を有する。SK-02は、幅80×90cm深さ14cmで遺構底部は平坦な底面となっている。SK-03は、幅52×66cm深さ19.3cmで、1個のピット（径20cm、深さ13cm）をもつが、SK-01に遺構の一部が切込まれている。SK-06は、幅46×54cm深さ11cmで、径14cm深さ10cmのピットをもつ。SK-06~08については、深さ6~17cmでそれぞれ平坦な底面をもつ。SK-09は、幅46cm深さ14cmでP59により切られている。

SK-01~10からは、SK-05を除いてそれぞれ遺物の出土が認められる。このうち、SK-02・03・06・07・09からは、遺物の内容について判別できうる物が出土したが、その他の土壙では細片の土器片が出土したにとどまる。SK-02・03・06では弥生土器片及び石器（SK-03で出土）が、SK-07・09では、弥生土器片・石器（扁平印石）と共に、須恵器及び土師器片が出土した。SK-02・03・06については、弥生時代に形成された遺構であると考えられるが、SK-07・09については遺構埋土の上部で、時期的に混合した遺物が出土したため、遺構形成の時期区分については明確にし難い。

S X -01~05

調査区に散在する不整形土壙である。いずれも部分的な検出である。SX-01は、調査区北部で検出され、幅1.4m×3.3mの範囲で、深さ30cm前後である。遺物は、弥生土器片と共に須恵器及び土師器片が出土した。SX-02は、P23~27の西側で検出された幅1.22m深さ9cm検出時の東西幅16cmの、西側に続く土壙である。出土遺物では、印石、弥生土器片（大腰式土器）がある。SX-03・04からは、弥生土器の小破片が、SX-05では弥生土器片、印石と共に須恵器片が出土した。SX-02~04は、弥生時代前期後半～中期にかけて形成された遺構と考えられる。

P 1 ~ P 65

調査区全体に散在するピットである。ピットのなかで、P1~P3及びP46・P48・P50・又P62・P63はピット間の間隔及び方向から、据立柱建物址を構成する柱穴であると考えられるが、部分検出であるため具体的な内容は不明である。その他のピット群についても、調査区の制約上、遺構の性格について検討することができず、周辺区域を含めた今後の調査により総合的に検討してゆくことが必要である。

P1~P3は、径20~24cm深さ8~25cmで、柱穴間の中心距離は70cmである。P46・P48・P50は、径24cm深さ7~12cmで柱穴間の距離はP46からP48で1.3m、P48からP50で1mを測る。P48及びP50では、弥生土器片が出土している。P62・P63は、径16~18cm深さ14cmで、距離は1mを測る。ピット全体では、径12~14cm・径22~24cm・径30cm前後の範囲に3区分されるが、ピットのなかには不整形な形状を呈するものもある。なお、出土遺物は、P6・18・23・34・35・50・52・54・60で時代判別の可能な遺物が出土したほか、P5・10・11・13・14・17・20・26・30・33・36・38・43~46・48・67で絆片の土器が出土している。このうち、P6・52・54からは弥生土器片及び扁平印石が、P60では弥生土器片・扁平印石・サスカイト片がまとまって出土した。また、P23及びP34・P35では土器及び須恵器片が出土している。ピットは、出土遺物から弥生時代中期・奈良末～平安時代前半を

前後する時期に形成されたものと大別して把握されるが、遺物の出土しなかったピットについては、所属時期を区分することはできなかった。

S B - 01

調査区中央部で検出された掘立柱建物跡であり、掘方を有する。桁行4間の検出で南北棟の建物址と考えられる。柱痕跡が2ヶ所で残り、直径24cmを測る。掘方は一定せず、不整形な隅丸方形で、掘方の底に石をもつものがある。

S B - 02

S T - 02の西南部で検出された柱穴である。1辺50~60cmの隅丸方形で、柱痕跡の直径は16cmである。部分検出のため、内容は不明であるが、調査区西側に遺構の存在が考えられる。柱穴のうち、南側の柱穴から須恵器碗片・甕片及び土師器片が出土した。

S B - 03

調査区南側で検出された柱穴である。一辺40×60cmの長方形である。掘方底までは深さ23cmである、柱痕跡の底部分が径10cmの範囲で残っていた。埋下層から、須恵器（高台付碗）片が出土し、上層部から、扁平叩石及び弥生土器片が混入して出土した。

5. 田村（神母ノ木・青木・徳蔵ノ後口）地区の調査

調査地点は、南国市田村字神母ノ木・青木・徳蔵ノ後口（南国市田村乙1010・1011・691~711番地）である。周辺は標高9.00m前後の水田地である。工事範囲（田村10番・15番工区、農道拡幅）に、南北に6ヶ所、東西に1ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した。東西トレンチでは、耕作土下疊層であり、遺構及び遺物包含層は存在しなかった。南北トレンチでは、農道東側の南北トレンチで、表土下50cmにおいて茶褐色粘土層上にピット状の落ち込みが計5ヶ所確認されたが、何れも不鮮明な落ち込みであり、遺構であるとは判断されなかった。当調査地点においては、トレンチ内の耕作土中から、数片の近世陶器片が出土しただけで、遺物包含層及び遺構の存在は確認されなかった。

（第14図、PL 23・24）

6. 前浜（三ノ戸「曾根」）地区の調査

調査地点は、南国市前浜字三ノ戸で、宝生寺北東の農道部分である。工事範囲（農道・水路改修）において、東西・南北にL字型のトレンチを設定した。（第15図） 幅30cm~70cmで、計3ヶ所設けたトレンチにおいては、耕作土（灰色粘質土）・及び第2層（黄茶色粘質土）中から、近世陶磁器、土師質土器片が採集されたが、遺物包含層及び遺構の存在を確認することはできなかった。

（第15図、PL 37）

7. 田村（高城）地区の調査

調査は、南国市田村字高城（田村高城乙1300-1~6・1301・1302・1303-1・3・4番地）において、工事範囲（農道拡幅・水路改修・田村4番工区）に東西にトレンチを設定した。調査区は、農道をはさんで北側を北トレンチ、南側を南トレンチとして区分した。（第16図、PL 40）

調査地北側は、標高1010m前後の畠地及び水田地であり、南側では標高9.70m前後で水田地となっている。調査区で検出された遺構は、掘立柱建物址1棟(SB-01)・溝2条(SD-01・02)・土塹3基(SK-01~03)・不整形土壤1基(SX-01)、ピット14個である。

層序

調査区南側では、トレンチの東側と西側で堆積土の相違が認められる。トレンチ西側では、耕作土直下で黄褐色粘礫層(地山層)があらわれ、間層はもたない。トレンチ東側では、耕作土(灰色粘質土)・暗茶褐色粘質土・黄褐色粘砂土(地山層)の順で堆積している。南トレンチの遺構検出面は、黄褐色粘砂層及び黄褐色粘礫層であり、表土から遺構検出面までの深さは、25cm前後であった。

調査区北側は、基本的に5層に区分される。第1層は耕作土で灰色粘質土層、第2層は灰茶色粘質土層、第3層は暗茶褐色粘質土層で、第4層は淡茶色粘質土層、第5層は黄褐色粘砂層である。第5層黄褐色粘砂層は、遺構検出面で地山層であるが、調査区東側にかけてゆるやかに傾斜している。調査区東端と東端では比高差30cmを測る。第3層暗茶褐色粘質土層上では、SD-01・02、SK-01、SX-01が検出されている。

遺構

SD-01

北トレンチの西側で検出された溝であり、第3層上において確認された。埋土は第2層灰茶色粘質土で、近世に属する陶器(高台付碗)片が出土した。遺構は、幅30cm長さ16mで、深さ2~3cmを測る。溝底部が残っていたものと思われる。

SD-02

北トレンチ東端で検出された東西方向の溝である。第3層上で検出し、埋土は、淡茶色粘質土である。幅32~34cm、長さ2.7mで東西方向であるが、調査区東端できれいでいる。調査区東端は、幅96cm深さ25cmで南北方向にかけての落ち込みであるが、SD-02との関係及び遺構自体の性格は現段階では不明である。SD-02からは、土器片、須恵器片が出土している。なお、SD-02はSK-01によって切られており、SD-02の下層で第5層上にはピットが1個存在する(埋土は第3層と同質の暗茶褐色粘質土)。

SK-01

SD-02を切って形成された土壤である。幅32×42cmで深さは18cmである。埋土は、茶色粘質土である。

SK-02

北トレンチ西側で検出された土塙で、部分検出の遺構である。幅1.3m×60cm以上深さ20cm、遺構内の落ち込み(44×42cm以上)では深さ34cmを測る。第5層黄褐色粘砂層を掘削して形成されており、暗茶褐色粘質層が堆積している。SK-02南壁では、暗茶褐色粘質層を掘り込んで、褐色粘質層が堆積している。褐色粘質層は、土器片(土器片)を包含しており、形状から遺構と考えられるもので、

SK-02上部での遺構の重複関係がとらえられるが、調査区に接して検出されたため、SK-02との平面的な切り合い関係を把握することはできなかった。SK-02からは、須恵器及び土師器片が出土している。

SK-03

北トレンチ西側で検出された土壙である。幅24cm×32cm以上で、遺構西側でさらに落ち込んでいる。落ち込みは、64×22cm以上で深さは20cmである。SK-03は、第5層黄褐色粘砂層を掘り込んで形成され、埋土は黄灰色粘質砂層と落ち込み内埋土の茶灰色粘質土（炭化物・土器片を含む）が堆積している。遺構内の落ち込みからは、須恵器（壺・壺底部）片・土師器片が出土した。

近世墓

調査区北側・北トレンチの西側で検出された。一辺1.24m×26cm以上の長方形形状の墓壙を有し、墓壙の東・西両端に土師質土器（小皿）が置かれていた。墓壙内には、長さ3~12cmの河原石が配置され、墓壙側壁に沿うように配石されていた。南側部が未検出であり、全体の内容はわからないが、配石された小石は、棺台の機能も有していたものと考えられる。墓壙の深さは、6~7cmであり、上部は削平により消失したものと考えられる。第3層上で検出され、埋土は第2層であった。

SB-01

調査区南側・南トレンチ東側で検出された、掘立柱建物址である。2間分の柱穴が確認されたが、方向及び性格は不明である。北トレンチでは検出されていないことから、調査区南側に広がるものと推定される。不整形な方形掘方を有し、柱痕跡が残っている。柱痕跡は直径22~24cmであり、掘方の一辺は52~68cmで不均等である。柱間の距離は、1.7m前後である。柱穴は4個検出されているが、西側で部分的に確認された柱穴は、方向からみて、別棟の建物址に伴う柱穴である可能性がある。このため、SB-01の柱穴としては、一応3個の柱穴の範囲でとらえることにした。SB-01の柱穴掘方内からは、須恵器・土師器片が出土している。検出面は黄褐色粘砂層上で、埋土は暗茶褐色粘質土である。

ビット

北トレンチ、南トレンチで散在して検出された。南トレンチでは、SB-01の東側でまとまって検出しているが、内容については、明確にしがたい。直径22~26cm、深さ9~14cmの範囲である。検出面は、黄褐色粘砂層である。北トレンチでは、第3層及び第5層上で確認された。直径16~22cmの円形を呈するが、第3層上で3個、第5層上で3個検出された。

遺構については、出土遺物及び遺構の重複関係から数期に区分される。遺構別に分類してみると、次の如くである。

A期……第5層上で検出のビット及び南トレンチ東側のビット群、SB-01, SK-02, SK-03

B期……SD-02・第3層上面で北トレンチ東側のビット

C期……SK-01

D期……SD-01・近世墓

A期については、SB-01・SK-02・SK-03の出土遺物から、奈良時代後半～奈良時代末の時期に該当する。B期は、SD-02出土遺物から、平安時代前半に、C期は平安時代中葉以降に形成されたものと考えられる。D期は近世初頭以降に属するものと思われる。A～D期に分類した様に、調査区ではすくなくとも4時期にわたる遺構形成がみとめられた。

8. 前浜(三ノ戸)地区の調査

調査地点は、南砺市前浜字三ノ戸(前浜三ノ戸2527-2・3, 2530-ロ, 2533～2536番地)である。調査区は、東西・南北方向のL字型トレンチ及び南北トレンチ3本を、工事範囲(農道拡幅、水路改修、前浜9番工区)に設定した。調査地周辺は、標高4.80m前後の水田地である。

(第18図, PL-46)

調査区北端の、0.8m×16.2m画の南北トレンチでは、表土下30cmで礫層(地山層)に至り、トレンチ北端の落ち込み(カク乱・現代)を除いて、明確な遺構及び遺物包含層は存在しなかった。調査区中央部のL字型トレンチでは、トレンチ東側の東西トレンチに設定した小トレンチ(TR3)から、堀状遺構が検出されたため、小トレンチを新たに設定した。(TR1～TR6)同様に、L字型トレンチ南側で設定している2ヶ所の南北トレンチにも、小トレンチを設けて(TR7～TR12), 遺構の確認作業を実施した。

小トレンチは、基本的に6層に区分される層序が堆積していた。第1層は耕作土で灰色粘質層・第2層は黄茶色粘礫層・第3層灰色粘礫層・第4層茶灰色粘質層・第5層青灰色粘土層・第6層は青灰色砂礫層である。TR3では、第5層下に青色粘砂層が堆積し、TR6の第4層下には灰色粘土層が堆積していた。各小トレンチの第2層黄茶色粘礫層中からは、須恵器・陶磁器片が混合して出土し、特に調査区中央部の南北トレンチにおいて出土量が多かった。第2層は、TR1～TR7において堆積しており、厚さ24～42cmを測る。TR8より南の調査区では、第2層及び第3層とした礫層の存在は認められず、粘質土又は、粘土層が堆積していた。調査区南端の南北トレンチにおいては、暗灰茶色粘質土層中から、須恵器・土師器・近世陶器片が出土した。

遺構は、集石遺構及び堀状遺構が確認された。(PL-48) 集石遺構(第19図)は、L字型トレンチのコーナ部において、第4層上面で検出された。長さ20～30cm大の河原石が配置されている。集石遺構の下部には、堀状遺構が存在し、堀状遺構のコーナ部にあたることから、堀状遺構の埋没後形成された関連遺構であると考えられる。

堀状遺構は、TR1・3・4・6・8～10で確認された。このうち、TR1・3・4・6・8の各トレンチでは、青灰色粘礫層を掘り込んだ堀肩部が検出され、青灰色粘土層が堆積している。堀状遺構の上部には、第2層の粘礫層が堆積しており、人為的に整地した状況を呈していた。TR9・TR10では、青灰色粘土層が存在し、堀状遺構の底部と考えられる。TR11・TR12では、堀状遺構及び青灰色粘土層は確認されなかった。

調査区の南側には、中世城跡である千屋城跡が所在する。今回の調査地点からは、千屋城跡関連の
(註)

遺構の検出が期待されていた。調査によって検出された堀状遺構は、その内容からみて、千屋城跡の外郭を画する掘跡である可能性が強い。

また、調査区における遺構の検出状況から、現在の調査区周辺の土地区画（農道・水田の境）のなかに、中世の土地利用状況をある程度推定したものが存在することが指摘される。

註 宅間一之編『千屋城跡』 昭和59年3月 南国市教育委員会

9. 大堀（町田・外場戸・防ノ城戸）地区的調査

調査地は、南国市大堀字町田、外場戸、防ノ城戸（大堀乙町田 268、防城戸 269・270・281、外城戸 300-1・2・306～309・315・317番地）で、工事範囲（農道拡幅・水路改修・大築1番工区）に計3ヶ所のトレンチを設定した。トレンチは、南からTR 1～TR 3と呼称することとした。TR 3では、第4層黒褐色粘質土が、TR 1・2では第4層暗茶褐色粘砂土が確認されたが、遺物包含層の存在は認められなかった。TR 1では、第5層上で第4層が落ち込んだ状態の溝状及びピット状の落ち込みが検出されたが、遺物の出土もみられず、不鮮明な検出状況で遺構であるとは判断し難い内容であった。

調査区のうち、TR 1東側の畠地からは、かつて扁平鋤銅鋤（扁平鋤六区契文神文銅鋤安永四年出土）（註）が発見されているが、今回の調査では、関連する具体的な資料を得ることはできなかった。

（第20図、PL・52）

註 大堀町田出土銅鋤。

岡本健児 『南国市史』上巻「第二編原始」 昭和54年 南国市

IV 出 土 遺 物

調査で出土した遺物は主として田村（尾中・北カリヤ・荒堀）地区の弥生時代遺物が多かった。遺物の観察にあたって、同地区出土遺物を中心のこととし、その他の地点で出土した遺物については、隨時ふれることとした。

I 弥生土器

1. 前期

(1) 1類

壺形土器 (1-1)

口頸間にしっかりと段部と有し、段部下端が一見すると突帯状を呈している。口縁部は一担垂直に立ち上がり強く外反する。

壺形土器 (1-18)

如意形に外反し口唇部下端に刷毛目施文原体による刻目を施す。頸部内外面に指頭圧痕を認め。外面に縱及び横方向の刷毛調整、内面は横方向の刷毛調整を施す。

(2) 2類

壺形土器 (1-6, 7, 10, 11, 13, 20, 2-24, 31, 32)

6, 7, 13は典型的な西見当式土器である。6, 7は口頸間に一条のヘラ描沈線を有し、13は半截竹管による双線間に刺突文を配している。三者共に器表の荒れが激しいが刷毛調整の下地の上を横方向にヘラ磨きを施している。10は口頸間に扁平な貼付突帯を配し突帯中央部に沈線をめぐらしておる一見すると二条突帯風に見える。口頸部外面に横方向のヘラ磨きを認める。11は口頸間に弱い段部を有する。器表の剥離が激しく調整は不明である。20は大型壺形土器の口縁部で、外面に指頭圧痕が顕著に残る。口唇部は強い横方向のナデ調整によりわずかに凹状をなす。

2-24, 31, 32は底部で、32は外面縱方向のハケ調整の下地の上をヘラ磨きしている。底部はわずかに上げ底状であり、成形手法が観察可能である。

壺形土器 (1-4, 16, 17, 19, 2-23, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 33)

すべて如意形口縁を呈する。4は頸部に一条のヘラ描き沈線を施し、口唇部は外傾する面をなし全面にヘラ状工具による刻目を配する。口縁部内外面ヨコ方向の刷毛調整である。16は頸部に2条のヘラ描き沈線を有し、口唇部はやや丸味をおびて全面にヘラ状工具で刻目を施す。17は他のものより強く外反し口唇はやや丸味を帯びており、ヘラ状工具で右上りの刻目を施す。19は頸部に3条のヘラ描沈線を有し、その間に刺突文を2列配する。

2-23, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 33は底部である。23・25は外面が少しせけている。26は上げ底で底部外面を指頭でナデしており、30は台形状をなす底部である。27は外底全面に黒斑

が見られる。

鉢形土器 (1-14, 15)

共に内湾気味に立ち上がり直口しておわるものである。口唇部の形態は14が水平な面をなし15は丸くおさめている。器表が荒れているが共に横方向のヘラ磨きを認める。共に前期1に遡る可能性もある。

蓋形土器 (1-21)

頂部は水平な面をなしゆるやがに外反しながら端部に至る。外面は縦及び横方向のハケ調整の上をヘラ磨きしている。内面に大きな黒斑を残している。

(3) 3 類

壺形土器 (1-2, 9, 12)

2は胴部細片であり4条のヘラ描沈線と4個の円形浮文を有する。9は他の土器と全く異なった胎土を有する薄手の土器である。頸部からわずかに外反する口縁部を有し、口縁外面に扁平な粘土帯を貼付し、刷毛目施文原体による幅の広い刻目を施す。12はやや大形の土器口頸部である。口縁部はあまり外反せず頸部に10条のヘラ描沈線を配し、更に中位に1条の扁平な突帯を貼付して指頭で強く押圧している。器表の荒れが激しく調整は不明である。

鉢形土器 (1-22)

わずかに内湾気味に立ち上って終わり、口縁端部は丸くおさめ外面に断面カマボコ状の突帯を1条貼付している。

2. 中期

遺構出土の資料は僅少で田村(尾中)地区の遺物包含層を中心に多量の土器が出土している。層位的にあるいは遺構別に各土器を検討することはできないがその形態等によって3類に大別することができる。

(1) 1 類

中期1類に該当するとみられる赤生土器は壺形土器のみであり、A・B・Cに分けられる。

① A (2-38, 42, 47, 48)

大きく外反する口縁部を有するタイプである。42はラッパ状に外反する口縁部で端部は丸くおさめる。47は口縁部に貫通する刺突文を配し、口唇部に右上りの刻目を施す。48も同様に貫通する刺突文を有するが、内面に横直線文を有し口唇部下端に刻目を配する。38は上腹部細片で横波状文を有する。

② B

赤生前期の3類における薄手の壺形土器の系譜上のものであり、口縁部の形態によってB-①、B-②に分けることができる。

B-① (4-68~72)

口縁部をやや厚くつくり、その下端にヘラによる鋭い刻目文を配し、更にその下に微隆線文を貼付している。

B-② (1-8)

大きく外反する口縁部を有し先端部がB-①と異り、先端部が尖っている。口縁外面下には断面カマボコ状の突帯を有し刻目を施す。

C (1-3)

上脣部絞片であり弱い階段状を呈する文様を有する。

(2) 2 類 (2-34~37, 39~41, 43, 44, 46, 3-49)

2類に該当すると見られる弥生土器も壺形土器のみである。胴部に櫛描文と突帯が盛行するものであり、櫛描文は波状文と直線文で構成されるが、これらの土器は突帯と文様帶との関係から分類可能であり、且つ先後関係にあるものと考えられるが、今回は出土量が少ないのであえて分類せず2類として一括しておく。46, 49は口頸部の破片であり、46は直線的に外方に立ち上がる頸部から口縁部が外方に強く屈曲する。49は46と同様の口頸部のプロポーションを有するが、口縁部外面に粘土帯を貼付しており、貫通する刺突文を有する。また口唇部には右上りの刻目を刷毛目施文原体によって施している。2-43は頸部に刺突文を有しその上に櫛描文を配していたものと考えられるが器表の荒れが激しく明瞭でない。

(3) 3 類 (4-79)

高杯形土器の細片である。杯部が深くなるタイプであり、外面に4条の凹線文を有する。口唇部は水平な面をなす。

(4) 4 類

中期4類に該当する弥生土器には壺形土器、高杯形土器、変形土器がある。

① 壺形土器

すべて口縁部外面に粘土帯を貼付するものであるが、文様の有無等によってA・Bに分けることができる。

A (3-50~58)

口唇部はゆるやかに外反し口唇部は55以外はすべて横方向の強いナデにより凹状をなしている。Aの特徴は口唇部に文様を有するということである。50は口唇部に一条の沈線を有し、その上にヘラで刻目を施している。51・53・57は口唇部上下端に刷毛目施文原体で刻目を施し、口縁部外面には指頭圧痕が著しい。内外面刷毛調整を施している。52・55・56は口唇部下端にのみ刻目を施し、55は外面の刷毛調整がわずかに観察できる。他のものは器表の荒れがひどく調整観察は不能である。58は口唇部及び口縁部内面に櫛描波状文を配し、他のものに比較して頸部の立ち上がりが直線的であり、口縁部外面に指頭圧痕が残る。54は口唇部に斜格子文を配

す。

B (3-59~66, 4-73, 76)

口縁部の形態や外面の粘土帯貼付手法はAと同様であるが、Bは全く文様をもたないところに特徴がある。口唇部は59以外はすべてAと同様に横方向の強いナデによって凹状をなしている。61, 62, 64, 73は外面に指頭圧痕が顕著に残る。また76は口縁外面に貼付した粘土帯が剥離している。

C (2-45)

口頭部の形態はA・Bと同様であるが外面に粘土帯を貼付しないものである。口唇部は丸くおさめ棒状工具による大きな刻目を施す。

D (4-77)

凹線文を有する土器である。肩のかなり張った器形で上下に広く拡張された口唇部には4条の凹線文を配し、更に竹管で刺突された円形浮文が3個一組で貼付されている。

他のほとんどすべての中期土器が比較的軟質であるのに対して本例は焼成が堅硬である。

壺形土器底部 (4-80~86, 5-87, 88, 91, 92)

80, 85は外面ハケ調整を行い、内面には指頭圧痕が認められる。81, 83, 84, 86, 88, 91は内外面共に器表の荒れがひどく調整の観察はできない。82は眉毛調整の上をタテ方向にヘラ磨きをかけており、内面には指頭による強いナデが顕著である。92は他のものよりも小さく、わずかに上げ底をなす。

壺形土器胴部

最大径を胴部中位に有する壺形土器で、頸部に向ってゆるやかに内湾している。無文であり前述のA~Cに該当する口縁部を有するものであろう。

② 高杯形土器 (4-78)

杯部の細片である。立ち上り部外面に3条の凹線文を配し、端部は水平な面をなす。杯部内外面はヘラ磨きを施し特に外面は交互に方向を違えて丁寧に磨いている。

③ 变形土器 (3-67)

上胴部に最大径を有し、頸部に向って細まり口縁部は比較的直線的に外反する。端部は丸くおさめる。外面には指頭圧痕が見られ胴部外面下半にはススが付着している。器表の荒れが激しく調整は不明である。

壺形土器底部 (5-87, 89)

87は器壁が著しく薄くつくられている。89は底部成形手法を観察することができる好例である。

外面がススけている。

④ 鉢形土器 (5-90)

台形状に張り出した厚い底部である。

3. 後期

長野県 (4-74)

直線的に外方へ立ち上がる頸部からゆるやかに外反する口縁部を有する。端部の形状は不明であるが、口縁内面に櫛状波状文が見られる。外面刷毛調整の上をタテ方向にヘラ磨きを施す。

II 石器

1. 石鏨 (6-1, 2)

1は凹基式石鏨で先端部を欠損している。断面は菱形を呈す。全幅2.2cm, 厚さ0.6cm, 現存長2.6cm, 重さ3.3gを測る。正面は2つの大きな剝離と階段状剝離で、裏面は押圧剝離によって調整している。

2は長さ4.3cm, 全幅2.2cm, 厚さ0.9cm, 重さ7.3gを測る。正面は階段状の剝離により中心部を厚く残す。裏面も同様な剝離であるが、主剝離面を残しているために平坦である。1・2共にサヌカイト製である。これらは後述するフレークと共にカリヤ地区・SK-01から出土した一括遺物である。

2. 石包丁 (6-9)

背部外溝直線刃石包丁で3分の2程が欠損している。刃部は丁寧に研磨されているが他面はほとんど研磨されていない。中期のものである。注目すべきこととして、この石包丁が小形であるということ、今一つは石材が当地方の石包丁にしては珍しいセンマイ岩製であるということがあげられる。前浜(三ノ戸)地区・南北トレーニングで出土。

3. 扁平片刃石斧 (6-10, 11)

10は基部が欠損しているが、刃部の形状はよく観察できる。全幅4.7cm, 厚さ1.0cm, 重さ38.5gを測る。両主面、両側縁共に丁寧に研磨されており美しい光沢を放っている。特に刃部は鋭く研磨されている。11は完形品であり全長7.2cm, 幅4.0cm, 厚さ1cm, 重さ55gである。10が完全な片刃であるのに對して11は両面から研ぎ出されてる。勿論一面が強く研ぎ出され、他面は弱く研ぎ出されている。使用法の違いであろうか。两者共粘盤岩製である。

4. 大型蛤刃石斧 (7-13)

基部と刃部の一部が破損しているが、ほぼ全体の形状を見る事ができる。長さ12.3cm, 幅6.5cm, 厚さ4.1cm, 重さ550gを測る。刃部及び両主面は丁寧に研磨されているが、両側縁には著しい叩打痕がみられる。閃綠岩製である。田村(北カリヤ)ST-01から出土。

5. 打製石斧 (7-14)

長さ10.3cm, 幅6.1cm, 厚さ2.1cm, 重さ190gを測る。扁平長方形に近い形状をなし両短辺に使用による磨滅が見られる。黒色質岩製である。

6. 叩 石

河原石を簡単に加工またはそのまま利用している。形状によって4つに分類することができる。

(1) 1類 (6-8, 7-12)

8は棒状の河原石を利用したもので、一方の先端部に叩打痕が顕著である。砂岩製で長さ9.7cm, 幅3.2cm, 厚さ1.9cm, 重さ86gを測る。石器製作の槌石であろうか。12も河原石をそのまま利用したもので、ほぼ全周縁に叩打痕が残る。砂岩製で長さ10.3cm, 幅4.7cm, 厚さ2.1cm, 重さ148gを測る。

(2) 2類 (7-15, 17)

当地方に最も多く見られるもので、河原石を縦に割り自然面と剥離面とからなっている。縁部とまれに自然面に叩打痕が残るが、剥離面を使用することはない。15は93g, 17は163gを測る。共に砂岩製である。

(3) 3類 (7-16, 18)

扁平な河原石をそのまま利用したもので長側縁に叩打痕が残る。16は645gで、18は345gを測る。

(4) 4類 (7-19)

自然の河原石をそのまま利用した点では3類と同様であるが、重量が1000g以上のものである。19は一方の正面中央部のみに叩打痕が残る。砂岩製で1710gを測る。

7. 凹石 (7-16)

円形に近い扁平な河原石を利用している。一方の正面中央部に著しい叩打痕が見られる。砂岩製で重さ637gを測る。田村(尾中)地区で出土。

8. 刻 片 (6-3~7)

すべてサヌカイト製である。4は裏面の一縁部を押圧剝離によって調整している。6は一縁部を両面から押圧剝離によって調整している。7は楔形石器の可能性がある。田村(北カリヤ)SK-01で出土。

Ⅲ 土 師 器 (5-96, 插図-1)

96はしっかりした高台を有する椀であり、口縁部を欠くが底部から内湾して立ち上がる。1mm内外の砂粒を含み焼成は余りよくない。平安時代のものである。今一つ注目すべきものとして格子の叩目を有するものが出土している。胎土は1mm前後の砂粒を含み焼成は良好である外に黒斑があり、内面

はナデ調整をしている。古墳時代のものである。

96は、田村(高城)SD-02で出土。

IV 須 惠 器

(1) 杯 身 (5-99, 101)

99は外方に張り出す貼付高台を有す。高台末端は横ナデにより凹状をなしている。全面ヨコナデ調整を施すが、高台付近は特に強くナデられている。精選された胎土で灰色に発色し焼成良好である。101は受け部が水平に張り出し端部は丸くおさめ、立ち上り部との境が凹状をなしている。内傾して立ち上がり端部は丸くおさめる。内面は丁寧にナデられているが、外面は粗雑であり、粘土帯接合部が凹状をなして残っている。精選された粘土で断面セビアに発色する。99は、田村(荒畠)のP49で、101は田村(北カリヤ)トレンチで出土。99はMT21に、101はTK209に該当する。

註

(2) 杯 薩 (5-98)

つまみ部分の細片である。精選された胎土で灰色に発色する。奈良時代のものである。田村(北カリヤ)・トレンチ出土。

(3) 台形土器 (5-100, 102)

100は底部であり外方に強く張り出した貼付高台を有する。内外面丁寧な横ナデ調整を施す。精選された胎土を用い灰色に発色し、焼成は良好である。102は広口壺の口縁部であり、端部はつまり上げて横ナデをかけている。精選された胎土で灰色に発色、焼成は良好である。100は、田村(高城)・SK-03出土。102は、田村(尾中)地区北側で採集。

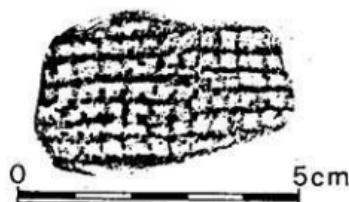
V 土師質土器 (5-94, 95)

共に小皿で内外にススが付着している。灯明皿として使用されたものである。94の底部には回転条切り痕が残っている。两者共に砂粒をほとんど含まず良質の胎土である。共に近世遺物であるが95は浅い様相を呈する。94は、田村(北カリヤ)で、95は田村(高城)で出土。

VI 磨 津 (5-97, 98)

共に皿である。97は見込みの釉を蛇目状に取っており、外面下部は施釉していない。高台は断面台形をなし、疊付けは面をなす。疊付け、見込みに砂が付着している。釉は薄緑色に発色。98は上げ底であり兜巾が見られ、灰及び砂が付着する。釉は内面全面と外面は一部底部にまで施す。露胎部は褐色に発色し、釉は薄緑色に発色; 見込に3ヶ所の砂止目がある。97・98とも田村(北カリヤ)で出土。

註 田辺昭三『須恵器大成』昭和56年 角川書店



遺物小結

以上、田村（尾中・北カリヤ・荒堀）地区出土の弥生土器を中心に遺物について細かい観察を試みた。最後に、出土した弥生土器を当地方の弥生土器編年の中に位置づけ、弥生文化の展開について少し触れてみたい。

- (1) 前期弥生土器は1～3類に分類したが、これからは当地方の前期土器編年で言うと1類は西見当I式土器に、2類は西見当II式土器に、3類は大様式土器に該当するものである。その区分としては、西見当I式土器は前期前半に、西見当II式・大様式土器は前期後半に位置づけられている。前期土器で注目すべき事は、3類・1～9の土器の存在である。薄手で堅密な作りであり、他の土器に比較して胎土・色調等に大きな差異が認められ、「大様式土器の中において西の地方から生まれたタイプ」として把握されている。このタイプの土器は、西部の中村市入田源池遺跡や葉山村永野遺跡等から多量に発見されており、南四国西部を中心に分布するものであるが、中央部においても少量見られ、興味深い問題を提起している。
- (2) 中期土器は1類～4類に分類し、1類は更にA・B・Cに分けた。1類Aは当地方の中期初頭の田村式土器に該当し、南四国中央部に一般的に分布するものである。1類Bは永野II式に該当し、先述した大様式の壺形薄手土器が中期初頭の土器へ変化したものと把握することができる。田村式土器が中央部を代表する中期初頭の土器であるのに対して、1類Bは「田村式土器の概念外の南四国西部に分布する独自の土器」として位置づけられている。ここで注目すべきことは本類が中期初頭の時期に南四国中央部の土器の主流とはならなくても前期に比較して量的にはかなり大量に入っているということである。この現象は当地方の弥生時代中期社会の展開を見るときに、大変重要な問題点を含んでいる。すなわち田村式土器の櫛描文土器の影響下に成立したもので、畿内第II様式に併行させることができる。永野II式土器と田村式土器との「分布図」は、南四国における土器分布図の東と西という問題だけでは解決できない大きな問題を歴史的背景としてもっている。更に付け加えるならば、中期中葉の段階になれば西部の土器の当地方への流入は一段と量的に多くなり、前期末以来の西部からの動きとでもいうべきこの現象は、他の遺物などと共に今後追求と分析とを繰り返さなければならない問題である。
- 中期2類土器は櫛描文と断面三角の突帯が盛行する時期のもので從来の編年で言うと城式土器に併行するものである。中期3類は1例のみであるが、山陽地方中期中葉の土器に併行するものと考えられる。
- 中期4類はA・B・C・Dに分けたが、A・Bはすでに述べたように貼付口縁を有するもので南四国独自の土器であり、主として中央部以西に多く分布する。AとBとは先後関係にあるものと考えられ、Aが古相、Bが新相を呈するものと考えられる。Dは、4-78の高杯と共に凹線文を有するものであり、共に当地方の龍河洞武士器に該当させることができ、中期末に位置づけることができる。

以上弥生中期土器を中心に分析を試みてきたが、今一つ注意しなければならないことは土器組成の

中で変形土器が極めて少ないとある。当方では前期までは変形土器と壺形土器はほぼ同程度出土しているが、中期になると突然に変形土器が減少する。これはどのような背景を反映した現象であろうか、今後追求していくべき課題である。

註

- ① 岡本健児「四国」「弥生土器」昭和58年 ニュー・サイエンス社
- ② 岡本健児・山本哲也 「高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年 葉山村教育委員会
- ③ 同上
- ④ 岡本健児 「高知県史考古編」1963年 高知県
- ⑤ ①と同じ
- ⑥ 「百間川遺跡調査報告書」1983年 岡山県教育委員会
- ⑦ ①と同じ

V まとめ

南国市前浜、田村、大塙地区において、9ヶ所の地点で調査を実施した。各調査地点ともに、限定された調査範囲ではあったが、多くの成果を得ることができた。調査地点と該当遺跡については以下のとおりである。

前浜（司例田・三ノ戸・三ノ戸「曾根」）地区…………田村遺跡群・千屋城跡

田村（尾中・北カリヤ・荒畠・高城）地区…………田村遺跡群

各調査地点の調査成果を該当遺跡のなかで整理し、まとめにかえたい。

前浜（司例田・三ノ戸・三ノ戸「曾根」）地区

前浜（三ノ戸）地区は、「千屋城跡」の北部に、前浜（三ノ戸「曾根」）地区は同遺跡の北東部にあたる。前浜（三ノ戸「曾根」）地区では、造構及び遺物包含層は検出されなかったが、前浜（三ノ戸）地区では、千屋城跡北外部外郭を画する柵跡と考えられる柵状造構が検出された。造構の検出状況は、現在の農道及び水田区画に沿っており、埋没した中世の造構について、現地形のなかから推測することができる程度可能であることを示唆する内容であった。また、柵状造構の埋土中からは、室町時代～戦国時代に属する陶磁器片が出土しており、千屋城跡に関する具体的な資料が増加することとな

った。

なお、前浜（司例田）地区及び三ノ戸地区南北トレンチからは、須恵器片が出土しており、この時期の遺構が周辺に存在することがうかがわれる。加えて、三ノ戸・南北トレンチでは結晶片岩製の石包丁片が出土しており、弥生時代に関する遺物の存在が認められた。

田村（尾中・北カリヤ・荒堀・高城）地区

（尾中・北カリヤ・荒堀）地点は、田村遺跡群の北部域にあたり、弥生時代遺物散布地として周知されていて、遺構の存在が推定されていた。これまで採集されていた遺物は、弥生時代中期に属する土器片が多く、弥生時代中期に属する遺構形成が考えられていたが、今回の調査により、弥生時代中期の遺構と併せて前期に遡る遺構が所在することが明らかとなった。また、採集された遺物を概観すれば、弥生時代前期前半から中期にかけての遺物が認められ、弥生時代前期～中期の期間で継続した遺跡の存在が明確となった。

検出された遺構を、調査地点別にまとめるところの如くである。

（尾中）地点……土壌ノ基、溝状遺構2、ピット14個で、何れも弥生時代中期を主として、形成された遺構であると考えられる。

（北カリヤ）地点……堅穴住居址1棟（ST-01）、溝1条（SD-01）、不整形土壌1基（SX-01）ピット34個、土壌5基（このうちSK-03は近世墓）である。SK-03を除き、検出遺構は弥生時代前期～中期に属するものである。出土遺物から、ST-01は西見当Ⅱ式土器の段階に位置づけられ、弥生時代前期前半に属するものと考えられる。なお、調査地点の南側、田村（西見当）地区において、弥生時代前期の環濠の所在が確認されていて、ST-01が、この環濠の延長線上で検討される可能性がある。また、SK-01からは、石鐵2点・石器剝片5点・叩石1点が一括して出土しており注目される。

（荒堀）地点……堅穴住居址1棟（ST-02）、溝2条（SD-01・02）、土壌10基（SK-01～10）、不整形土壌5基（SX-01～05）、堅穴状遺構（ST-01）1、ピット65個、掘立柱建物址3棟（SB-01～03）である。遺構は、弥生時代中期に属するものと、奈良時代末～平安時代前半に属するものとに大別される。弥生時代中期に属するものとして明確な遺構は、ST-02・SD-01・02・SX-02・P60があり、出土遺物から分類すれば、ST-02は田村式土器段階で弥生時代中期初頭に（以下弥生時代を略する）、またSD-02が同時期段階で形成され、SX-02が大槻式土器段階で前期後半～末に、SD-01及びP60が龍河洞A式土器段階で中期末に位置づけられるものと考えられる。また、ST-01及びSK-03からは、西見当Ⅱ式土器片が出土しており、直接遺構に伴うものであるとは判断され難い遺物ではあるが、弥生時代前期後半に遡る遺構の存在が調査地周辺で推測される。弥生時代における遺構形成について述べれば、弥生時代前期後半～末から弥生時代中

期末(但し、弥生時代中期中葉～後半に属する遺構については明確ではない。)に至る段階のものが認められる。

奈良時代末～平安時代前半に属する遺構として、SB-01～03がある。規模及び遺構配置については、調査区の内容からは不明であるが、奈良時代末～平安時代前半の遺構の存在は、田村遺跡群における歴史時代遺構を検討するにあたって、今後注意されるものであろう。

なお、調査区で検出されたその他の遺構については、遺構最下部において、弥生土器片と須恵器片が混在して出土するものが多く、所属時期を判別することが困難であった。

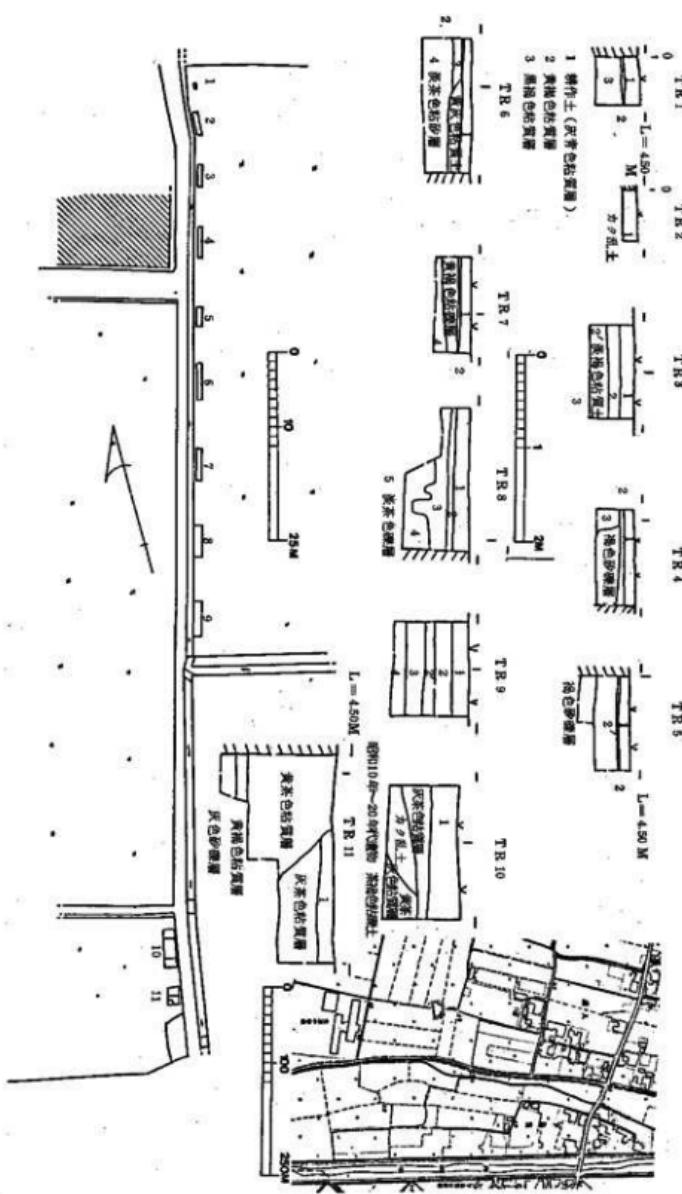
(高城)地点……掘立柱建物址1棟(SB-01),溝2条(SD-01・02)・土壙3基(SK-01～03)不整形土壙1基(SX-01),ビット14個及び近世墓1が検出された。遺構は、A期…ビットの一部及びSB-01・SK-02・SK-03(奈良時代後半～末)B期…SD-02,ビットの一部(平安時代前半)C期…SK-01(平安時代中葉～後半)D期…SD-01(近世墓)に区分されるもので、奈良時代後半～平安時代後半に属するものが中心であった。

(高城)地点の周辺では、現田川沿い(調査地点から東南約240mの地点)で奈良時代末～平安時代前半の遺物を含む包含層が確認されており、また(荒堀地點⁵)の今回の調査からは奈良時代末～平安時代前半の掘立柱建物址3棟が発見されていて、奈良時代末～平安時代前半にかけての遺物・遺構が認められる。(高城)地点で検出の掘立柱建物址・溝・土壙については、周辺地で確認されたこれらの遺構及び遺物と密接な関連を有するものであると考えられる。限定された範囲においての調査であるため、検出された遺構についての位置付けをすることは難しいが、「笠松」地区を中心にして、広範囲に遺構形成が行われていることが推定される。

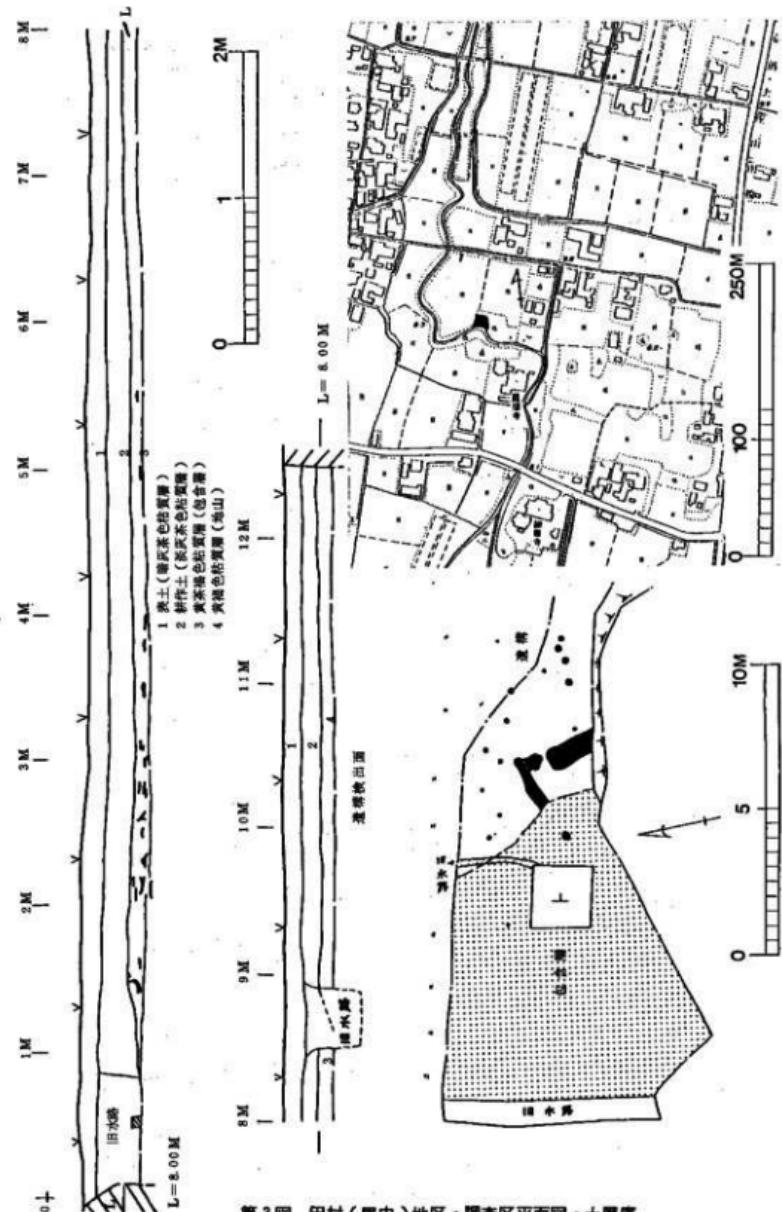
田村(神母ノ木・青木・徳蔵ノ後口)及び大塚(町田・外場戸・防ノ城戸)地区では、明確な遺物・包含層及び遺構は確認されなく、弥生時代及び奈良～平安時代についての知見を得ることはできなかった。南国市田村地区を中心にした遺跡群の存在のなかで、調査地点はいわばその外周地帯にあたるが、調査内容からみれば、居住地・耕作地・墓地等として利用されなかった空間の所在を物語るものと思われる。

註

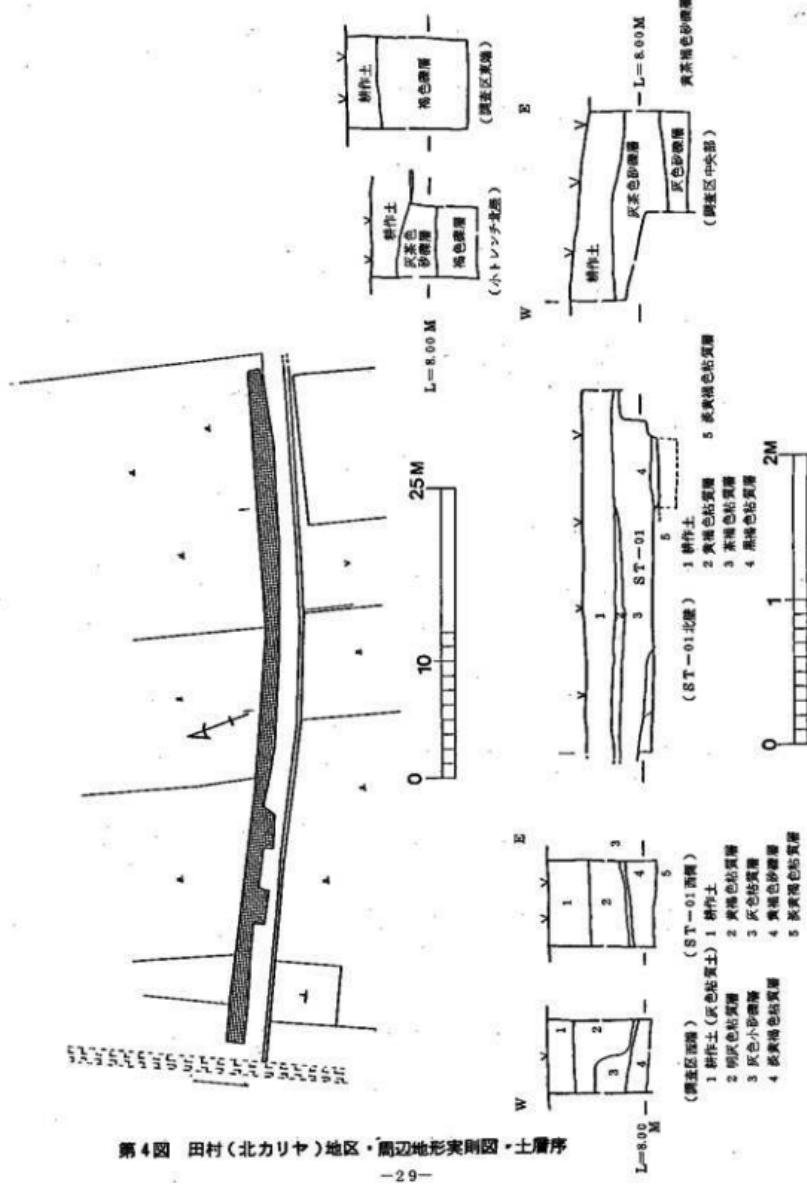
1. 宅間一之編「千屋城跡」昭和59年 南国市教育委員会
2. 岡本龍児「南四国における都目文土器の成立」高知女子大学紀要 人文・社会科学編第18巻 1970
3. 岡本龍児「南国市田村見当遺跡調査概報」高知県文化財調査報告書第14集 1964 高知県教育委員会
岡本龍児「第二編 原始」「南国市史」上巻 昭和54年 南国市
4. 土器の位置付けについては、(岡本龍児「四国」「弥生土器」)佐原真編 昭和58年 ニュー・サイエンス社)を参考にした。
5. 角谷和男・山本哲也「田村地区排水対策特別事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」昭和59年
高知県教育委員会



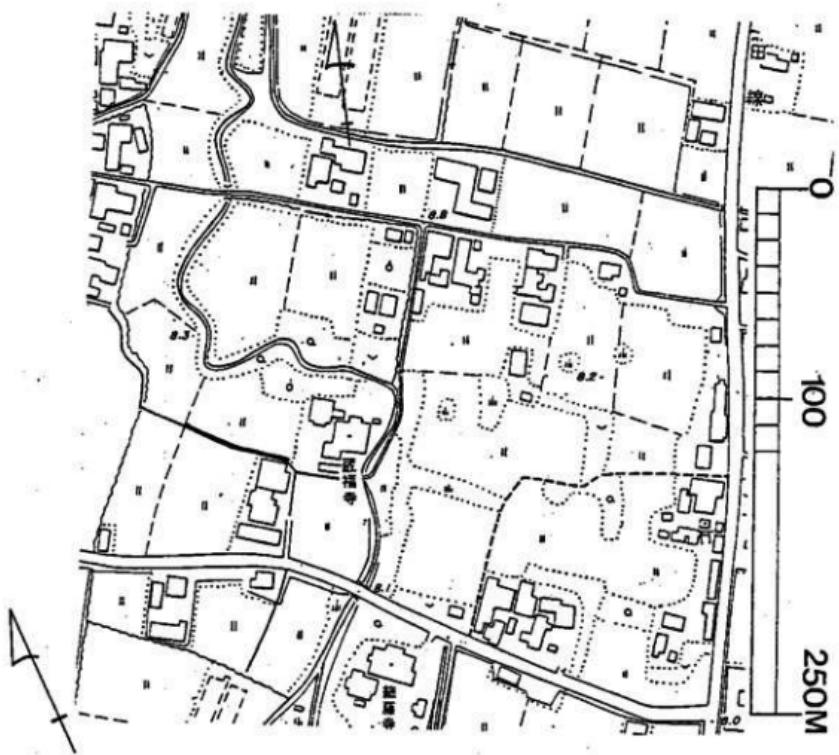
第2図 前浜(司例田)地区・調査区設定状況図・土層序(東整)



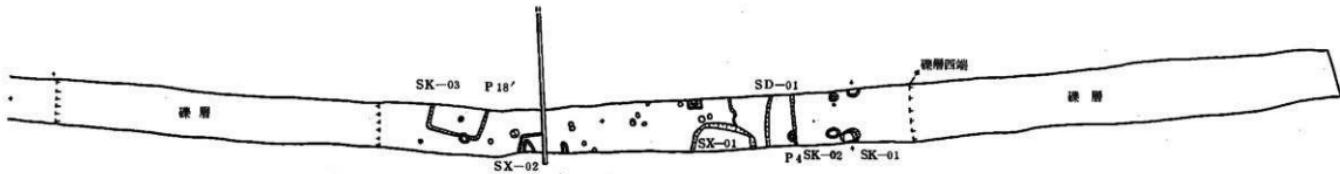
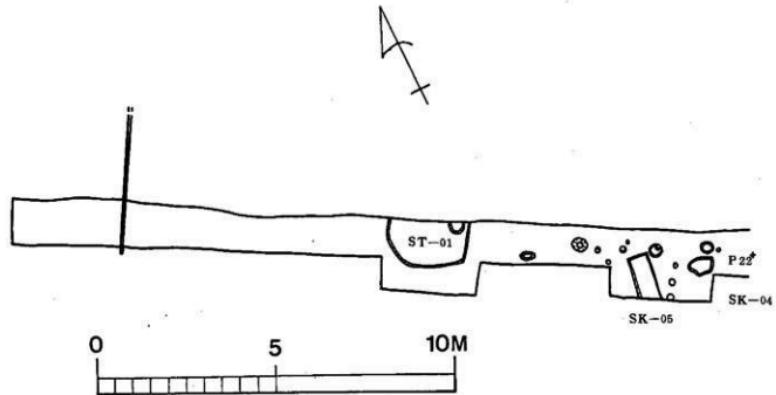
第3図 田村(尾中)地区・調査区平面図・土層序



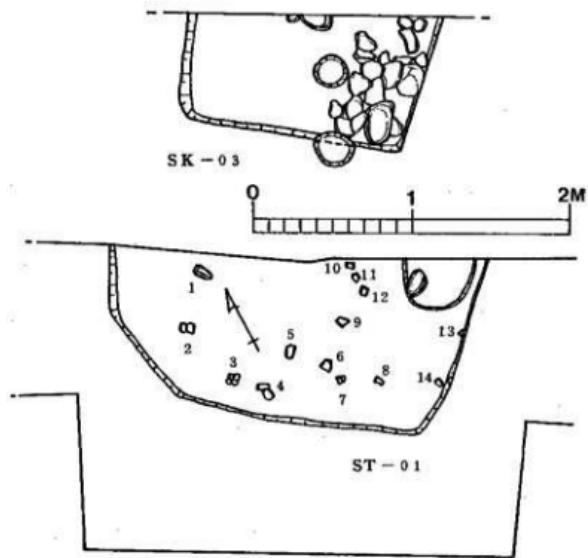
第4図 田村(北カリヤ)地区・周辺地形実測図・土層序



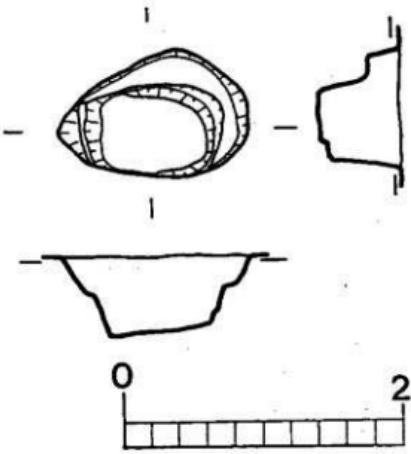
第5-A図 田村(北カリヤ)地区調査区設定状況図



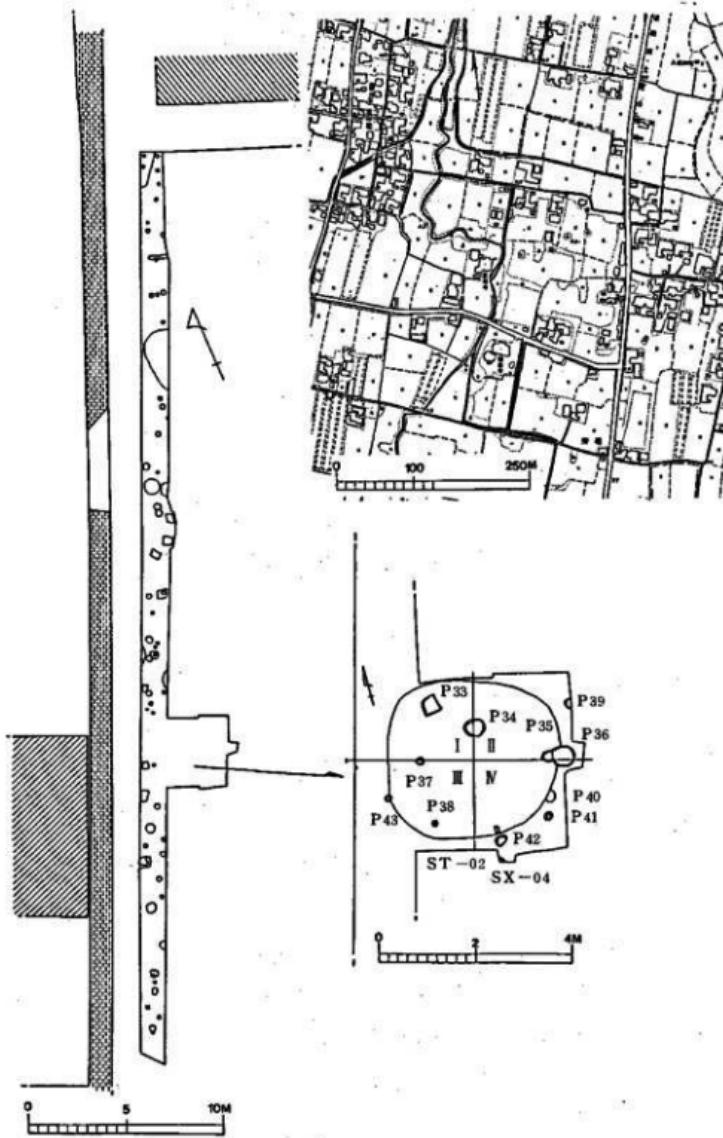
第5図 田村(北カリヤ)地区・遺構検出図



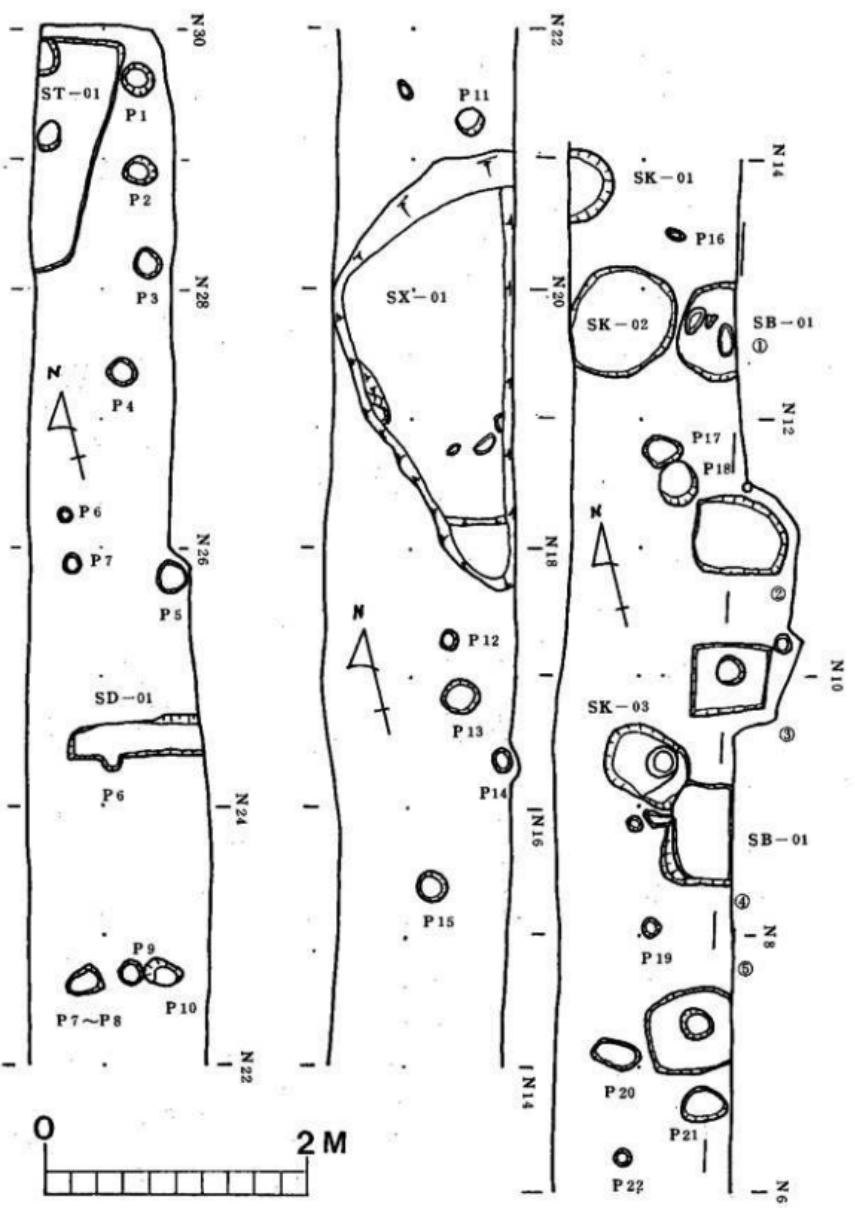
第6図 田村(北カリヤ)地区・遺構平面図(SK-03・ST-01)



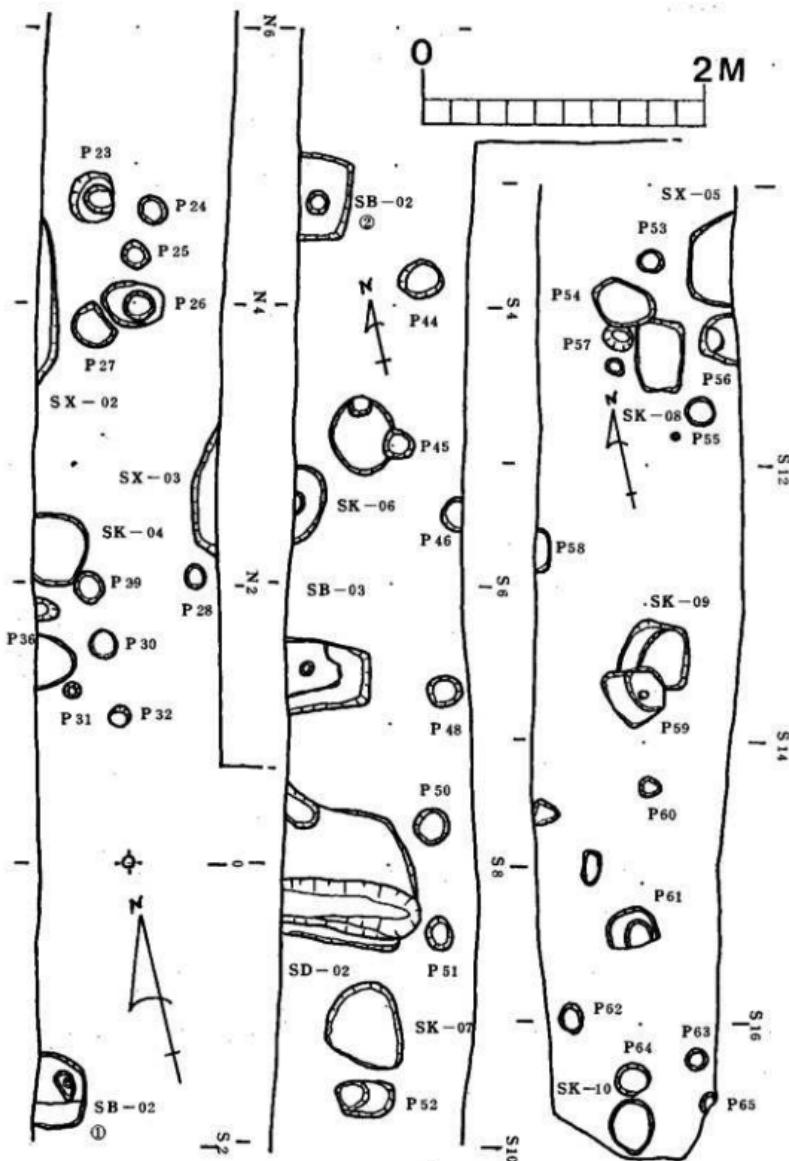
第7図 田村(北カリヤ)地区・SK-01



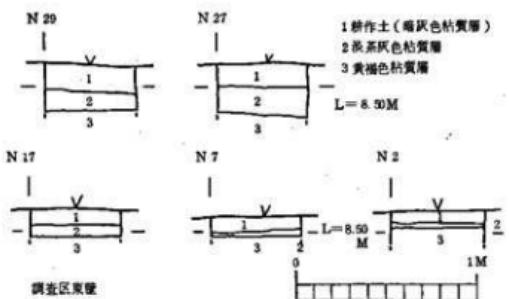
第8図 田村(荒堀)地区・調査区設定状況図
遺構検出図



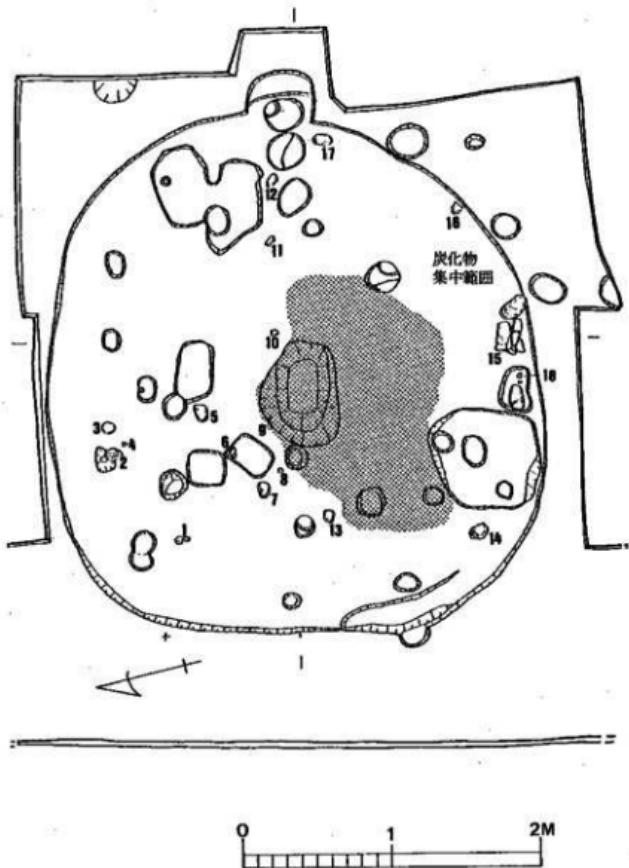
第9図 田村(荒堀)地区・造構平面図



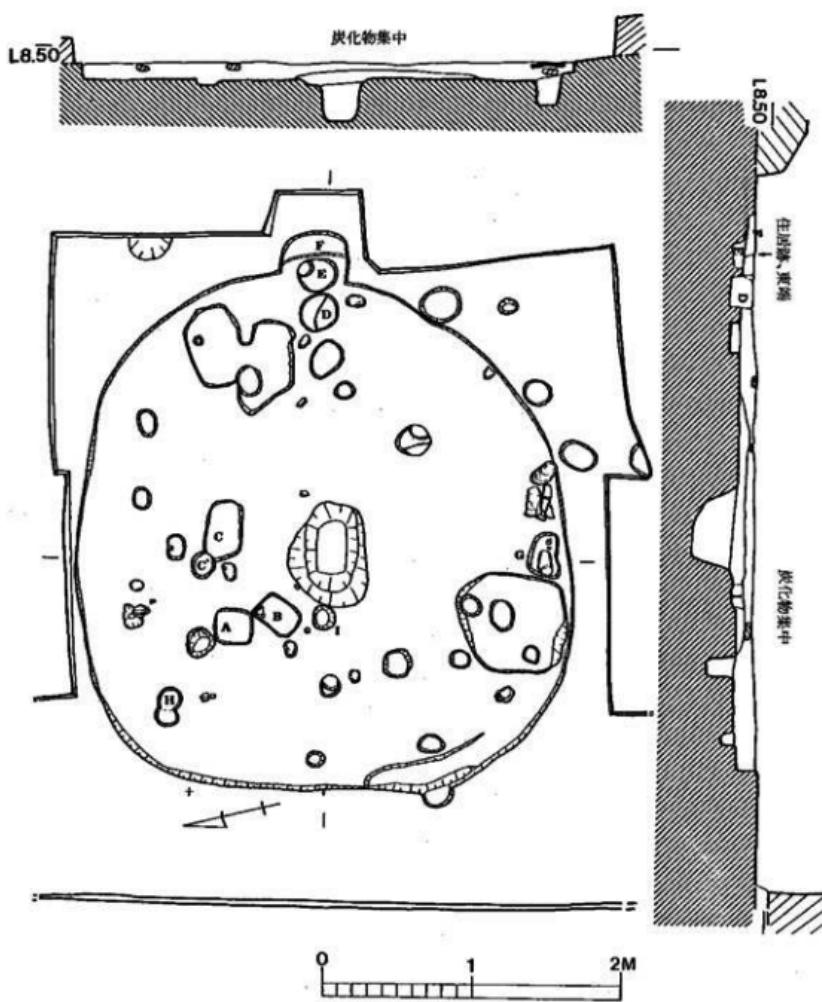
第10図 田村(荒畠)地区・造構平面図



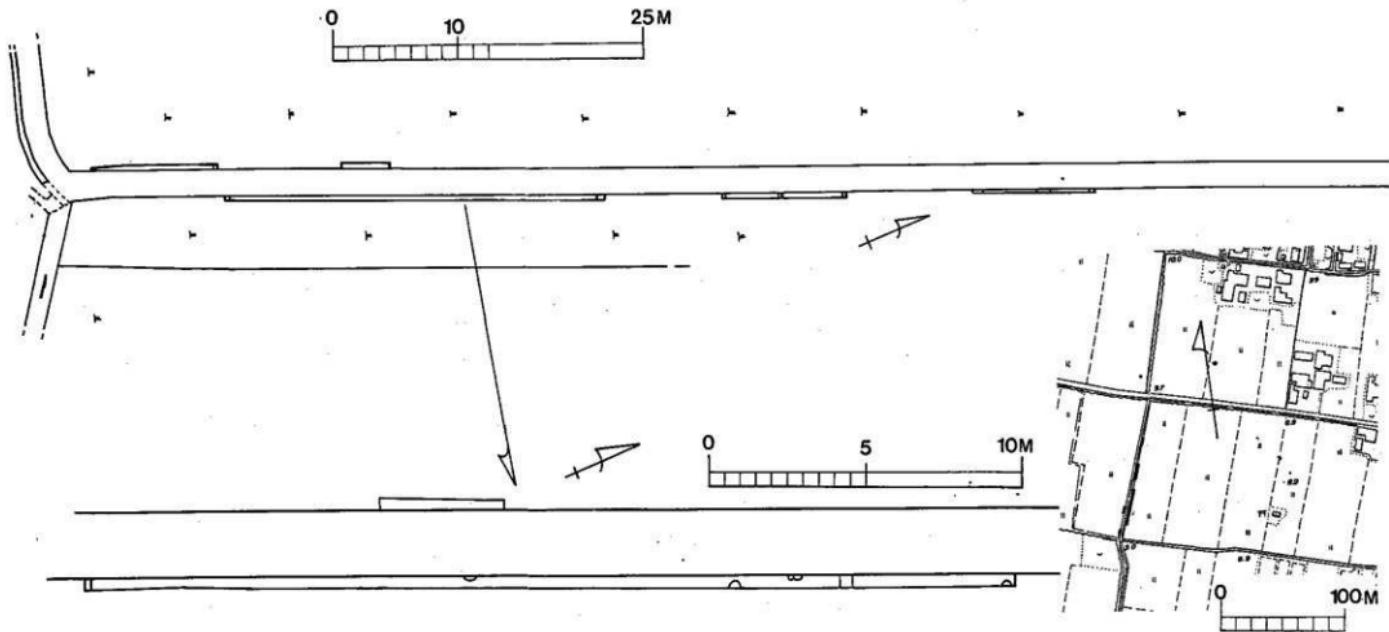
第11図 田村(荒畠)地区・土層序



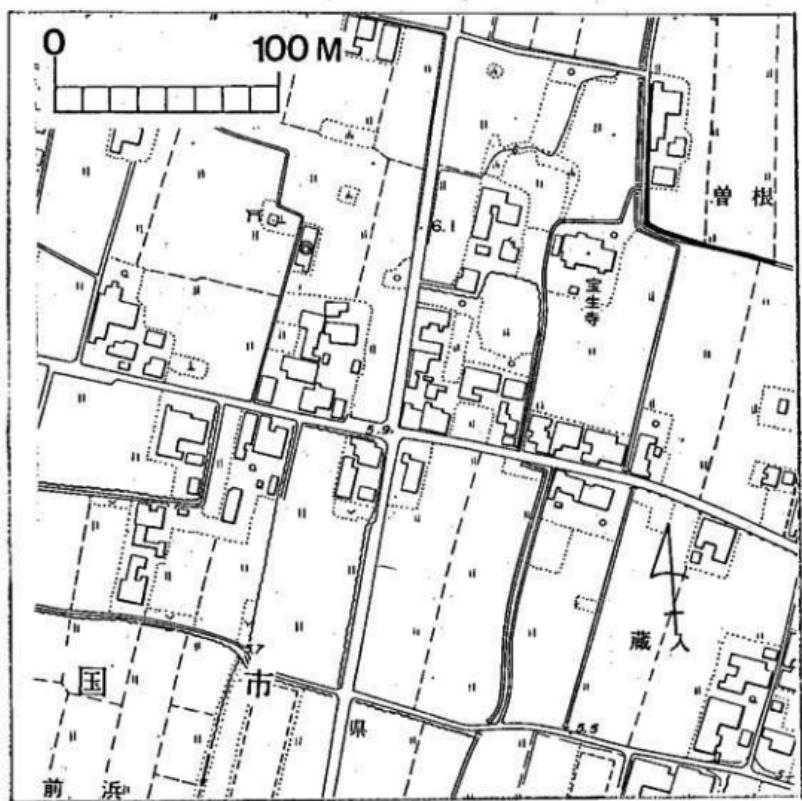
第12図 田村(荒畠)地区 ST-02 遺物出土状況図



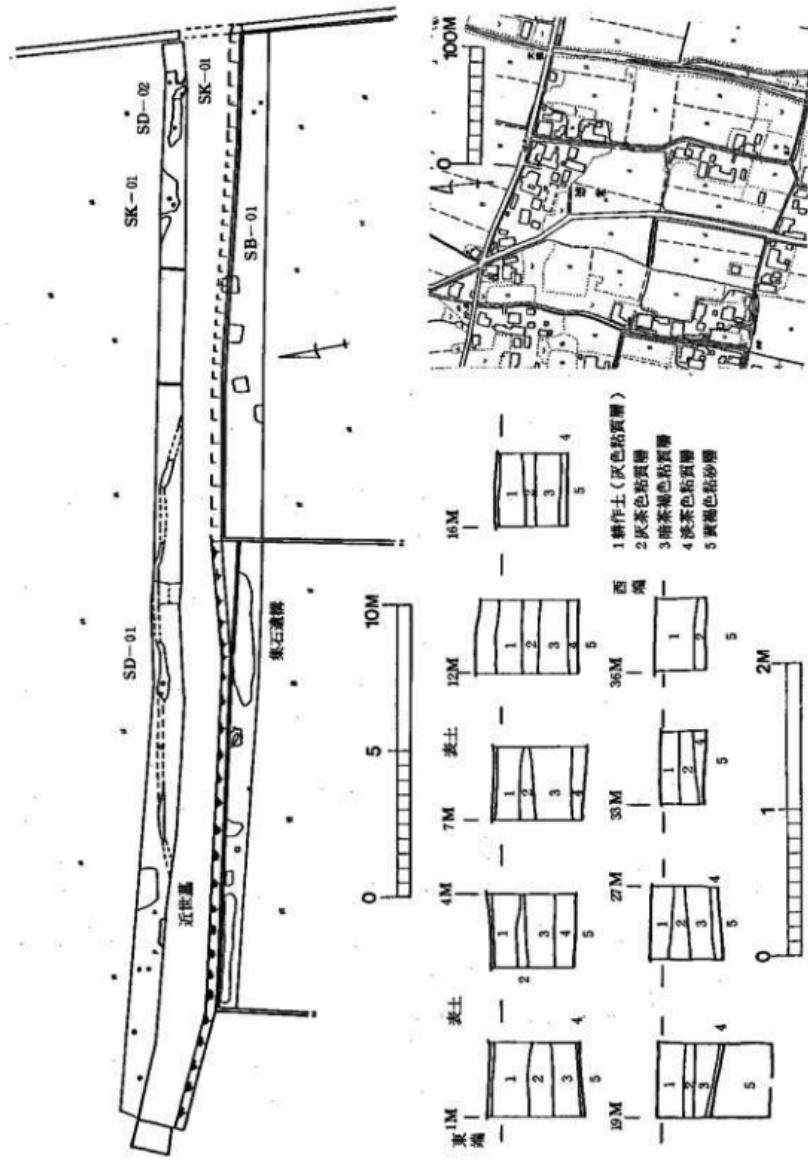
第13図 田村(荒堀)地区ST-01平面図



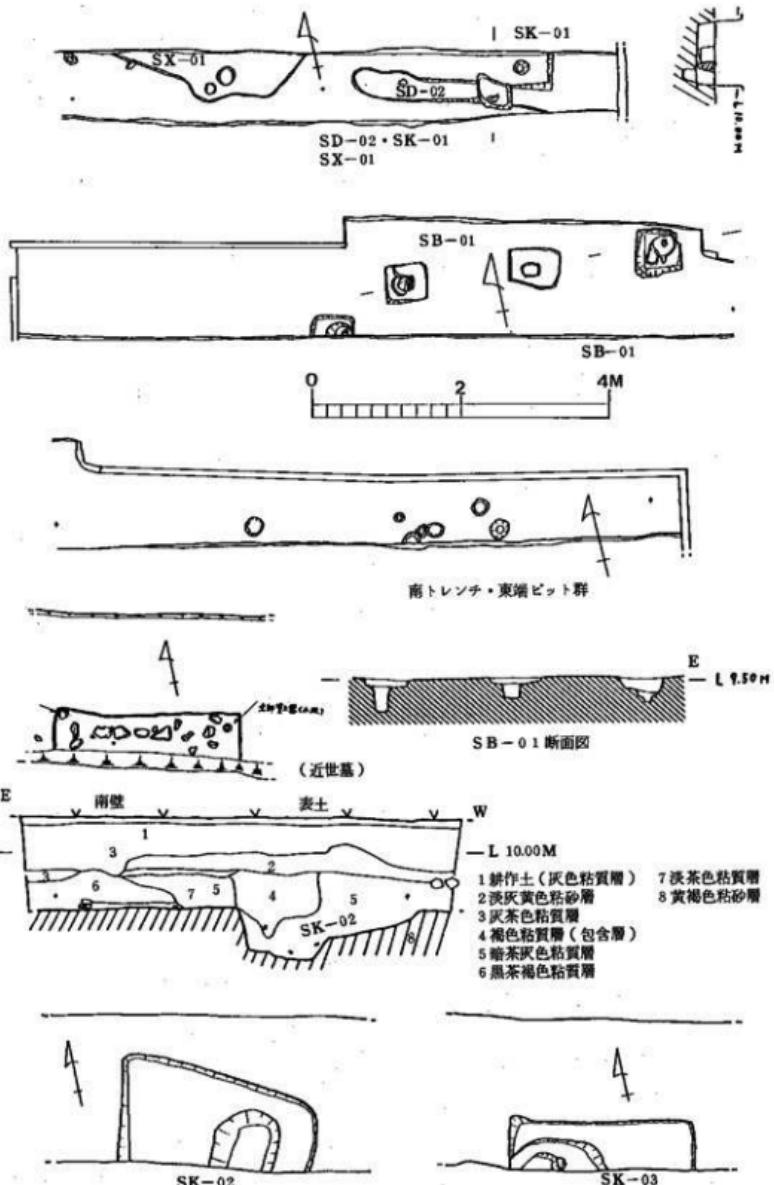
第14図 田村(神母ノ木・青木・徳藏ノ後口)地区調査区設定状況図



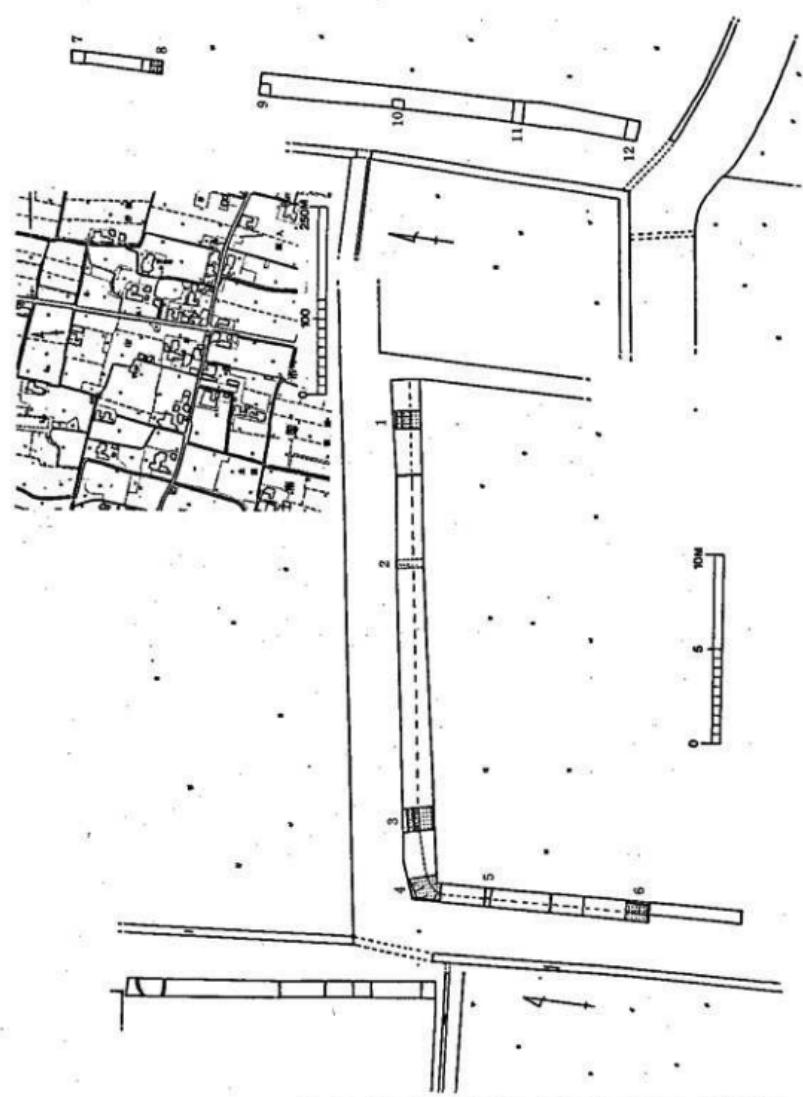
第15図 前浜(三ノ戸「曾根」)地区・調査区位置図



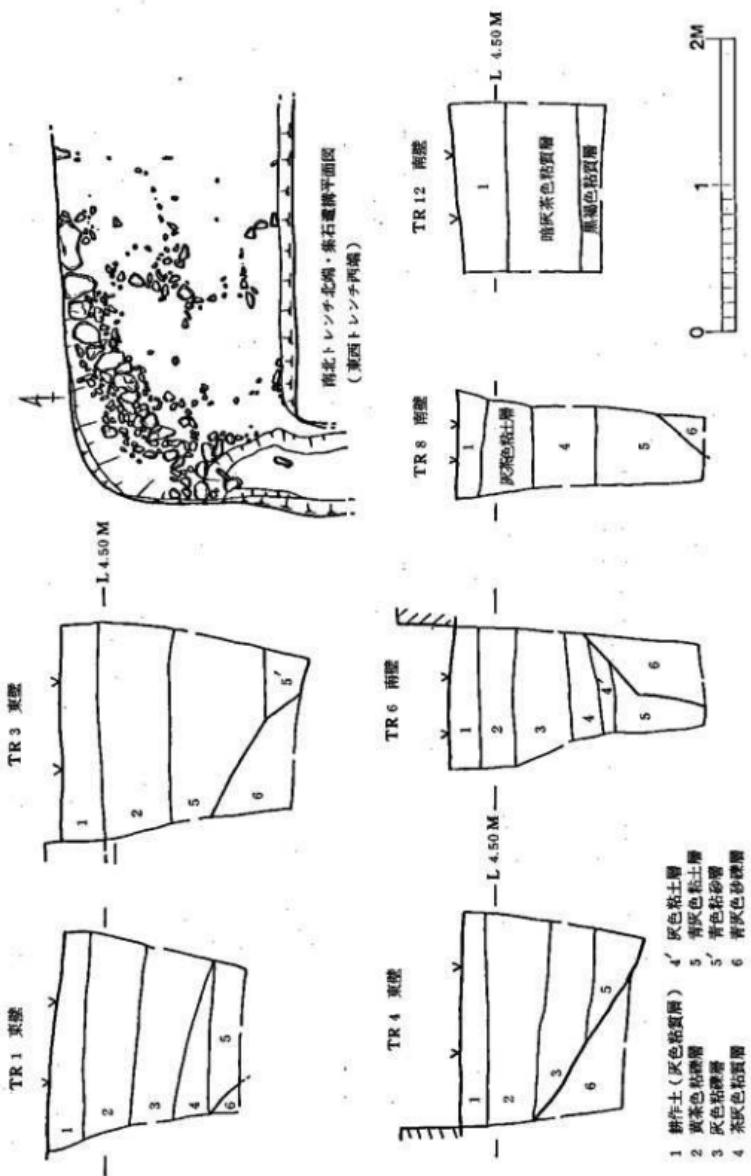
第16図 田村(高城)地区・調査区設定状況図・土層序



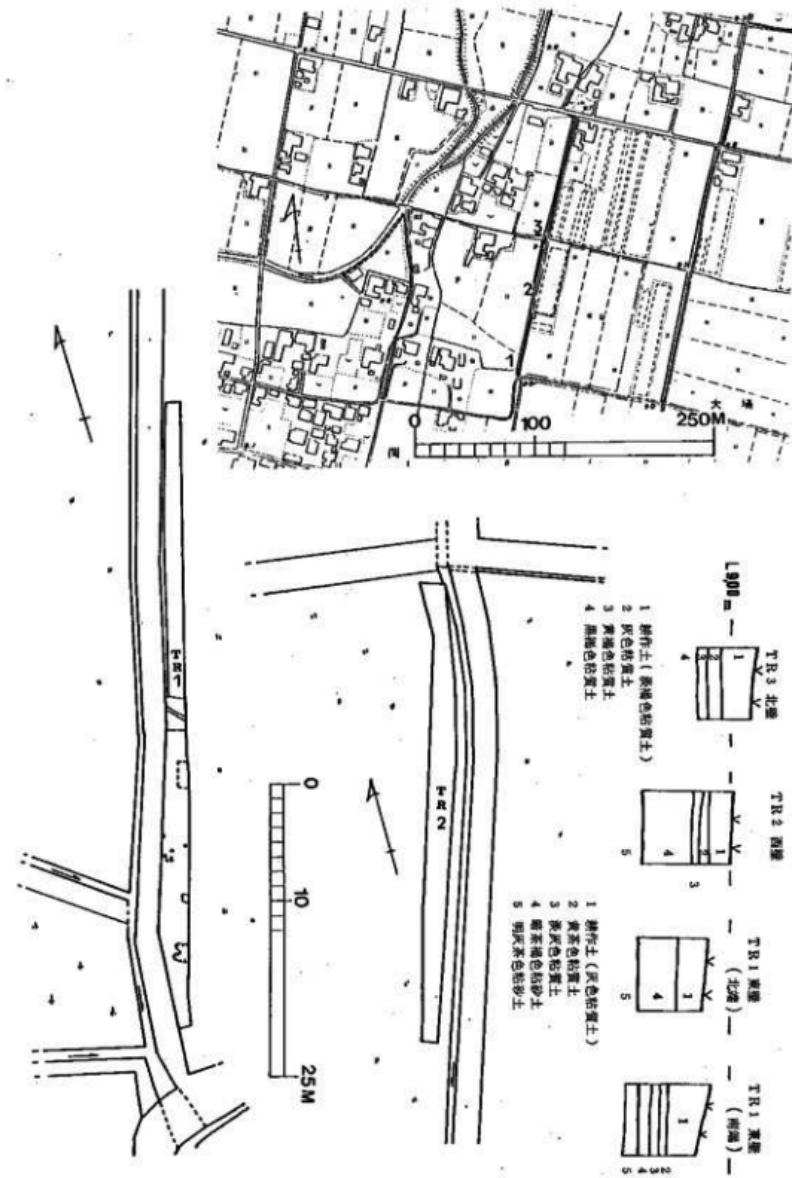
第17図 田村(高城)地区・遺構平面図 SK-02断面図



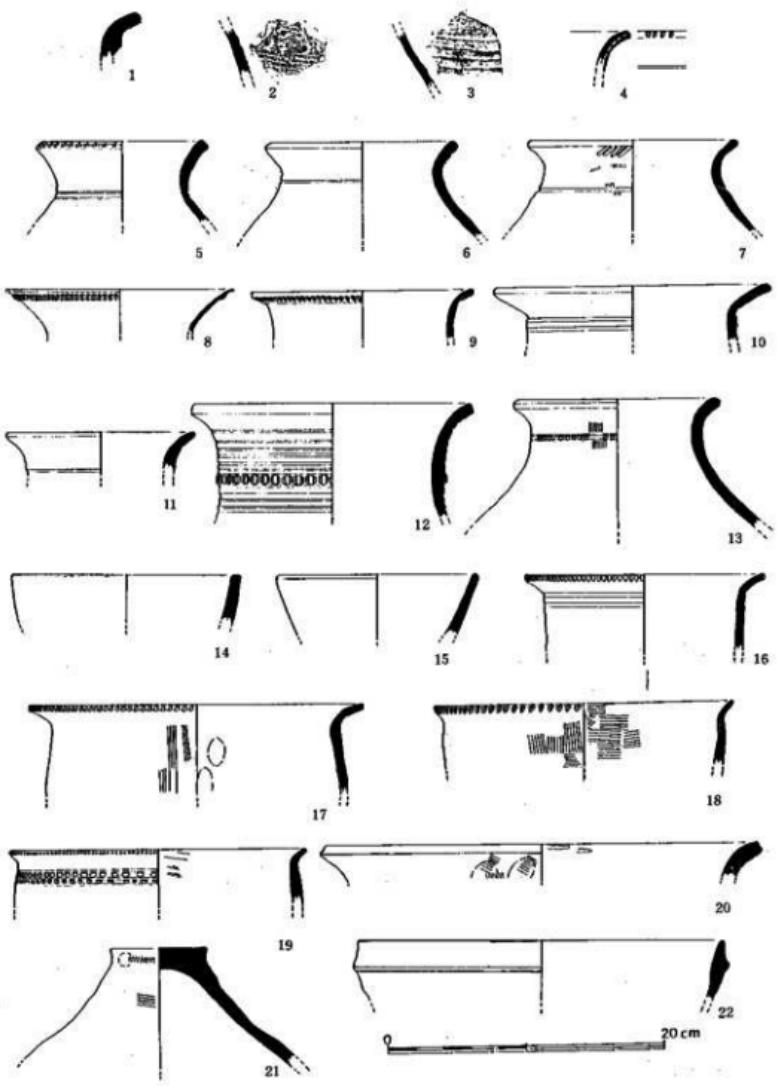
第18図 前浜(三ノ戸)地区・調査区設定状況図・遺構検出図
(千葉城跡 北側)



第19図 前浜(三ノ戸)地区・土層序、集石遺構平面図

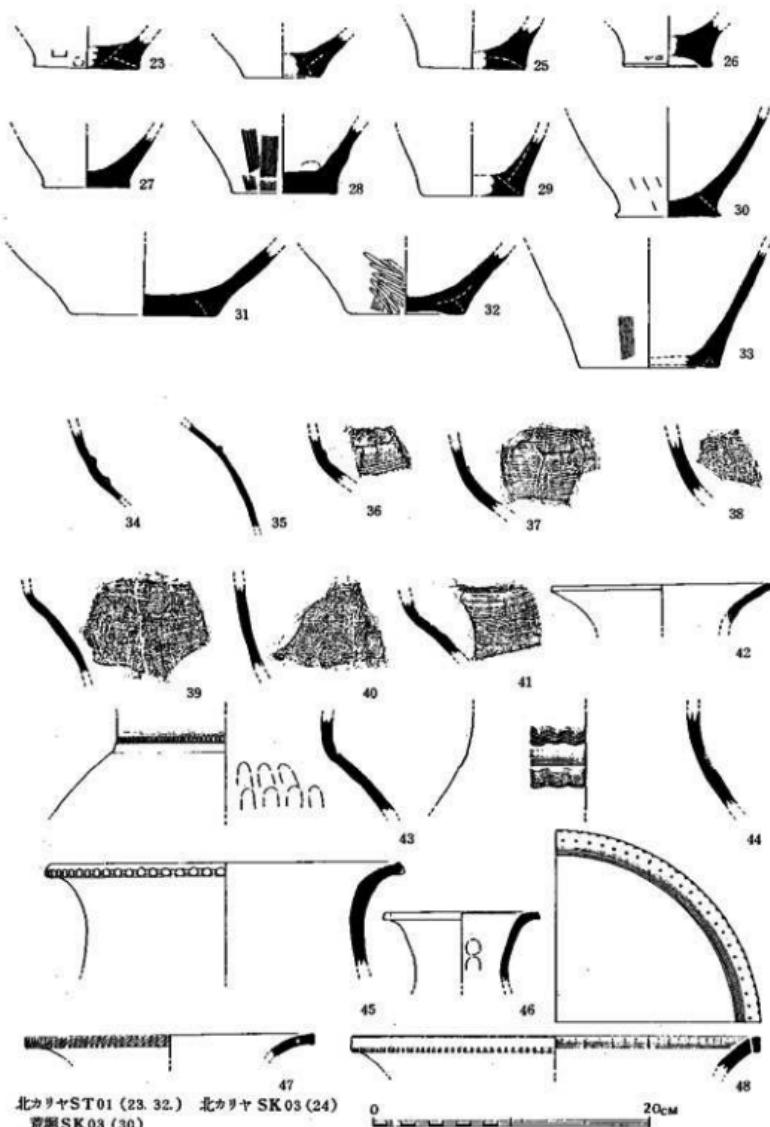


第20図 大場地区調査区設定状況図



北カリヤ ST 01 (7, 20) 北カリヤ包含層 (1, 4, 5, 6, 10, 11 ~19)
 荒畠 ST 01 (11, 21) 荒畠 SX 2 (12) 尾中包含層 (2, 3, 9)
 荒畠 ST 02 (22) 荒畠 SO 02 (8) 荒畠包含層 (12)

第21図 弥生土器実測図 1



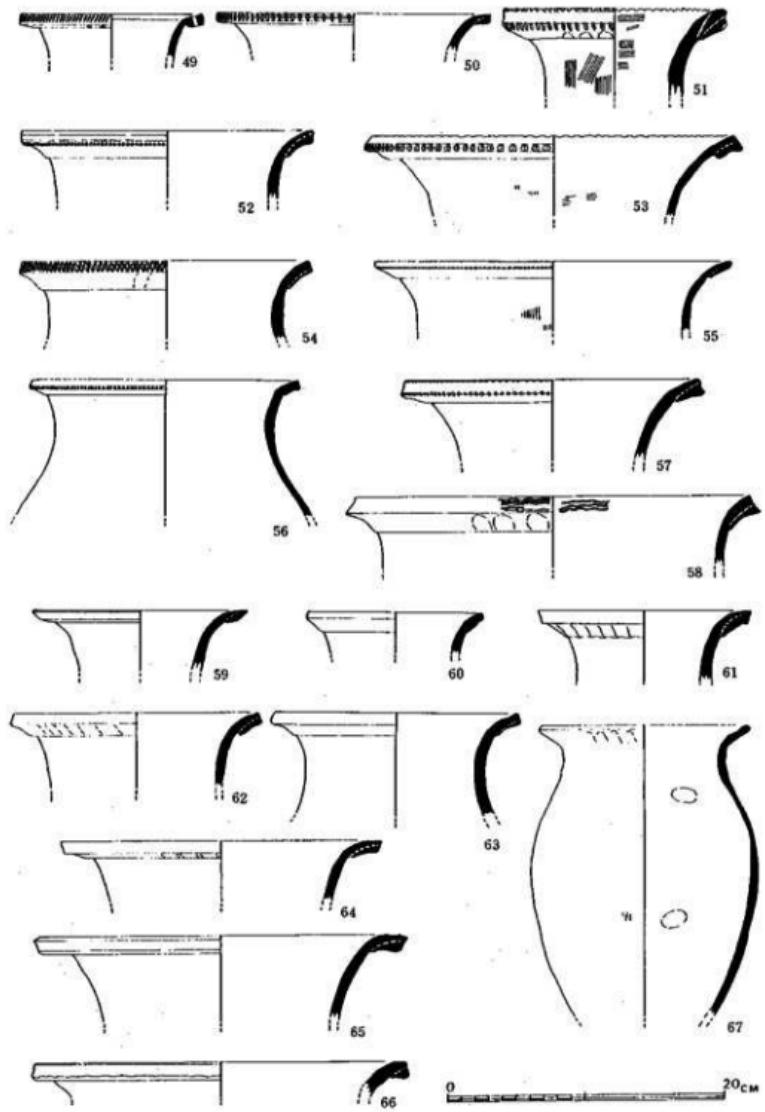
北カリヤ ST01 (23, 32.) 北カリヤ SK03 (24)

荒層 SK03 (30)

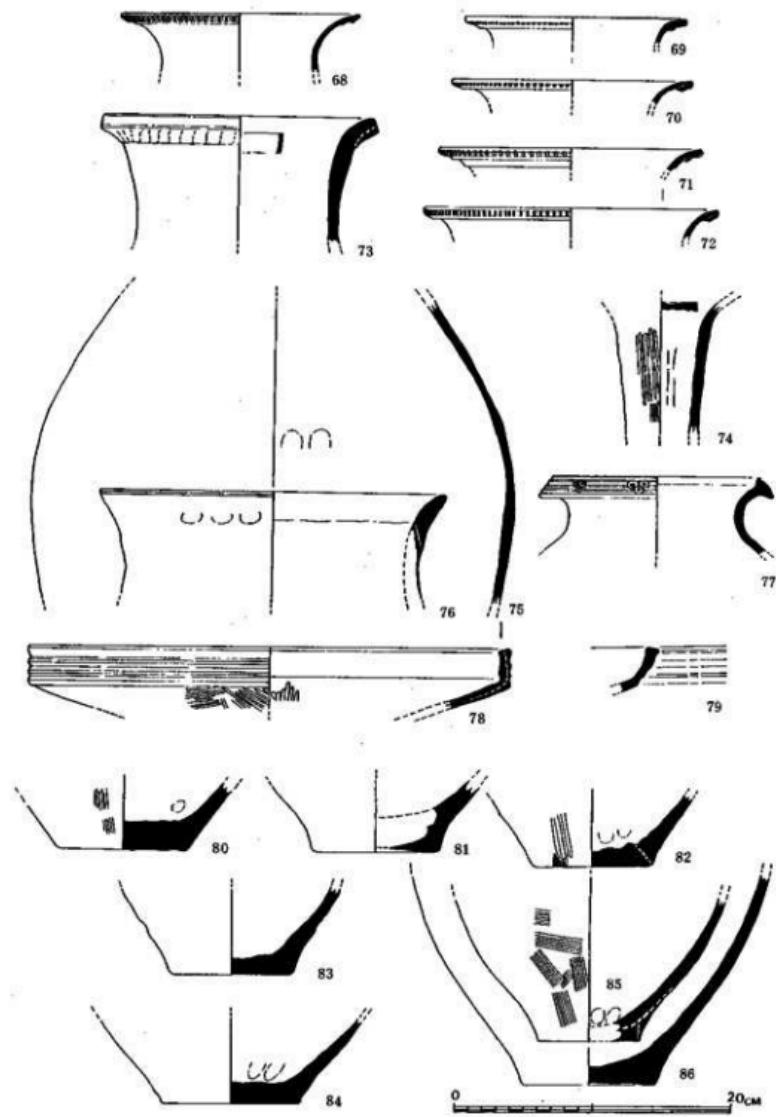
尾中包岩層 (25, 34~37, 40~45, 47, 48)

カリヤ包含層 (26~29, 31, 33, 38, 46)

第22図 弥生土器実測図 2

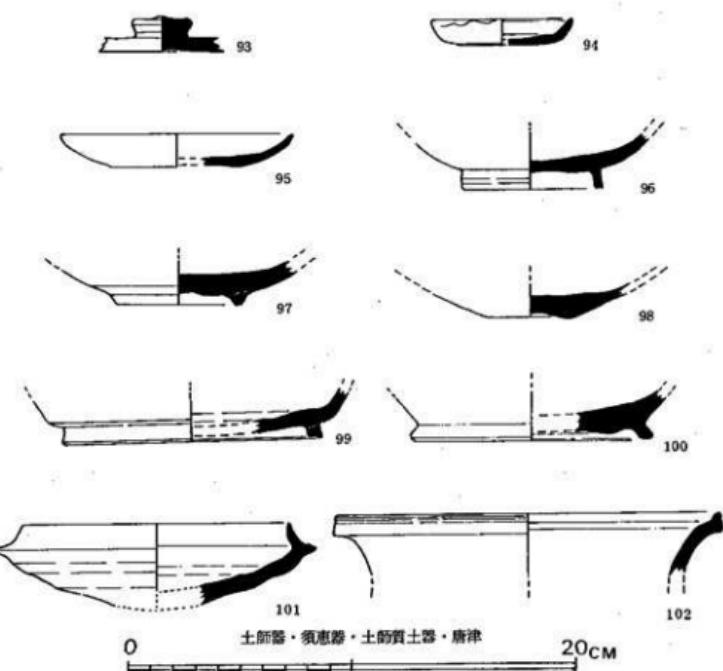
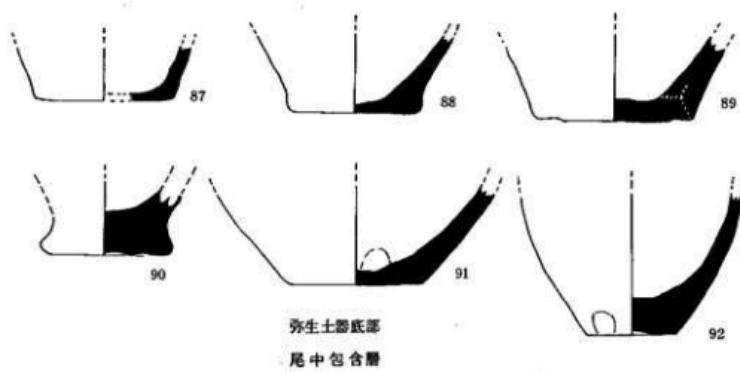


荒堀ST02 (49, 60, 67) 荒堀SD01 (53) 荒堀P60 (62)
尾中包含層 (50~52, 54~59, 61, 63~66)



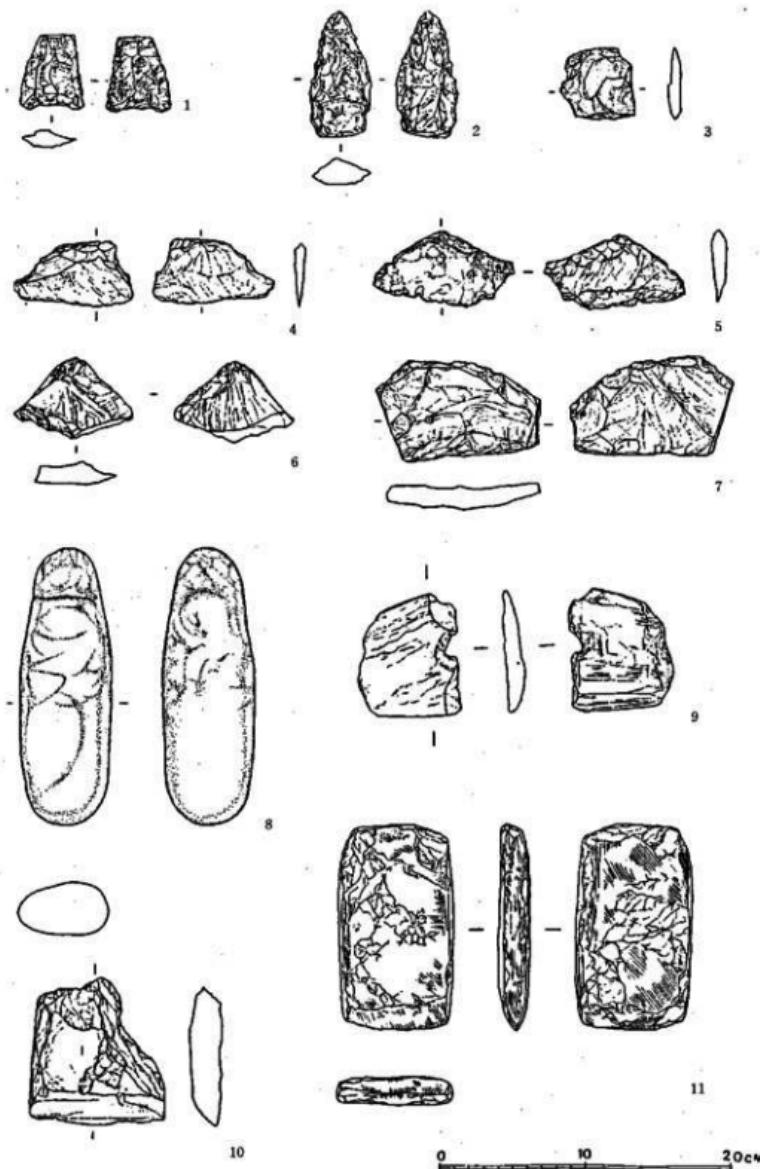
尾中包含層 (68~73, 75, 76, 80, 81)
北カリヤ包含層 (74, 77, 82~86)

荒振包含層 (78, 79)

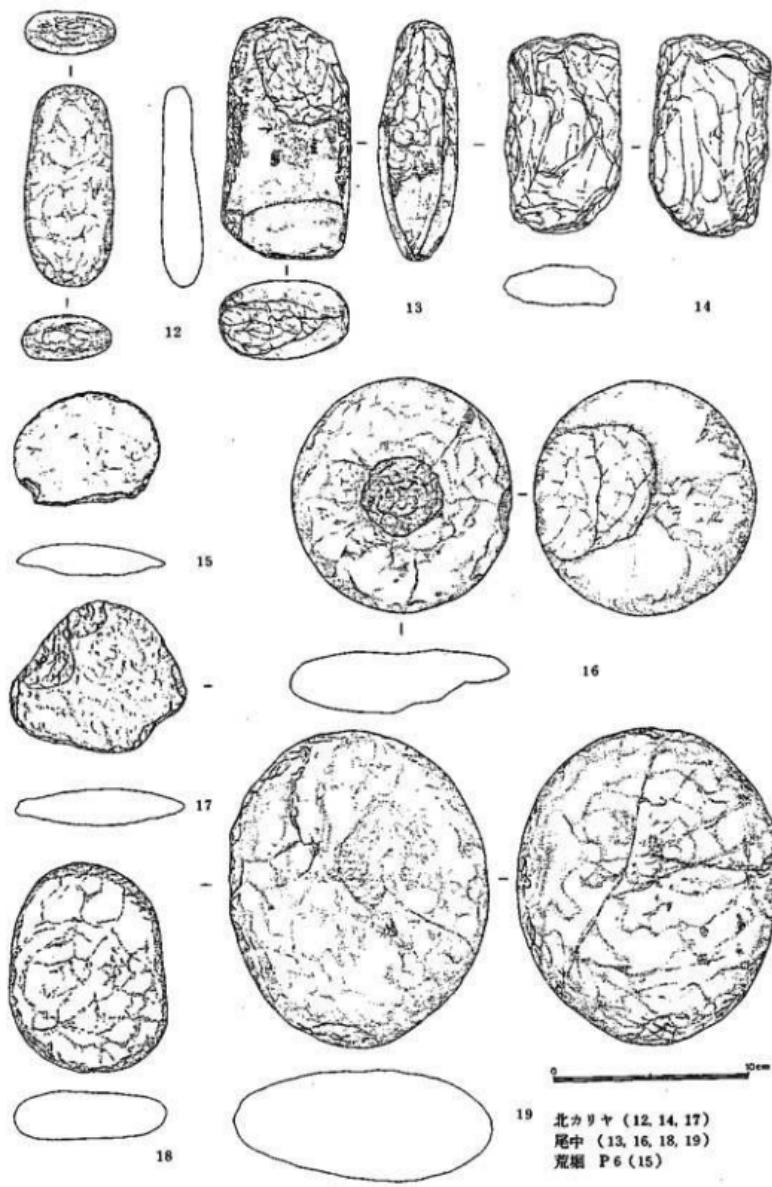


高波包含層 (95) SD-02 (96) 北カリヤ包含層 (93, 94, 97, 98)
高城SK 3 (100) 北カリヤ・トレンチ内 (101) 尾中 (102) 荒堀SB3 P 49 (99)

第25図 弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・唐津実測図



前浜(三ノ戸)南北TR(9) 北カリヤST01(11) 北カリヤSK01(1~7) 尾中(8,10)



第27図 石器実測図2

図版

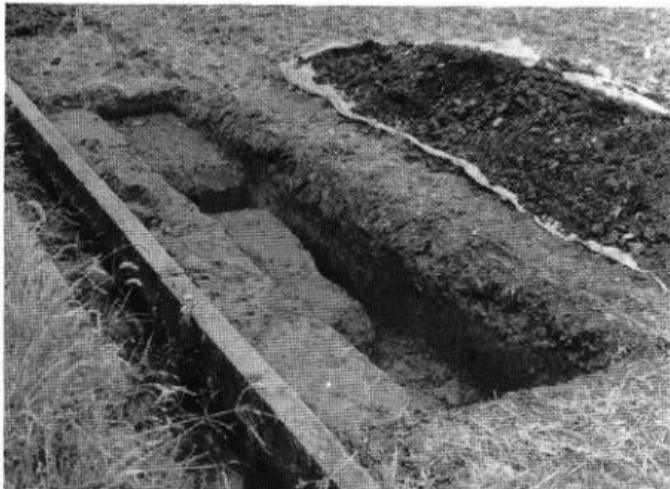


トレンチ設定状況（北から）



調査区遠景（南から）

前浜（司例田）地区



TR 6 全景（南西から）



TR 7 全景（南西から）

前浜（司例田）地区



TR 8 全景（南西から）



TR 9 全景（北西から）

前浜（司例田）地区



TR 10・TR 11 全景（南東から）



調査区南側遠景（北から）

前浜（司例田）地区



調査風景（南西から）



調査区全景（西から）

田村（尾中）地区



調査風景（西から）



S T - 0 1 (北西から)

田村（北カリヤ）地区



ST-01 全景 (西から)



SK-01・02検出状況 (西から)

田村 (北カリヤ) 地区

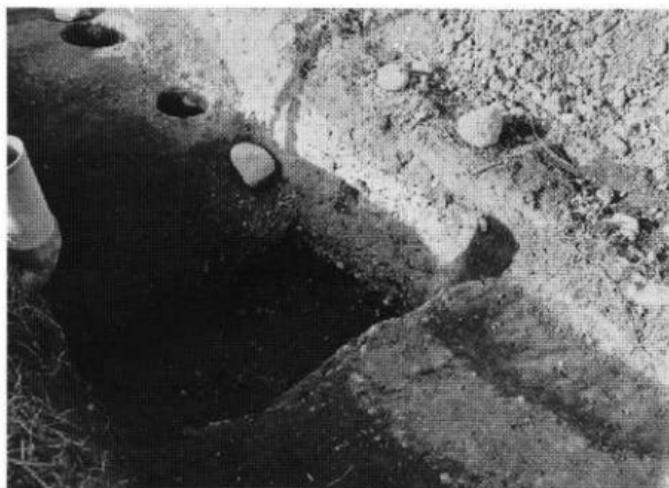


SK-03(近世墓)検出状況(北西から)



調査区中央部小トレンチ設定状況(南西から)

田村(北カリヤ)地区



小トレーンチ設定状況（南東から）



SK-04・05 P 23~34 検出状況（東から）

田村（北カリヤ）地区

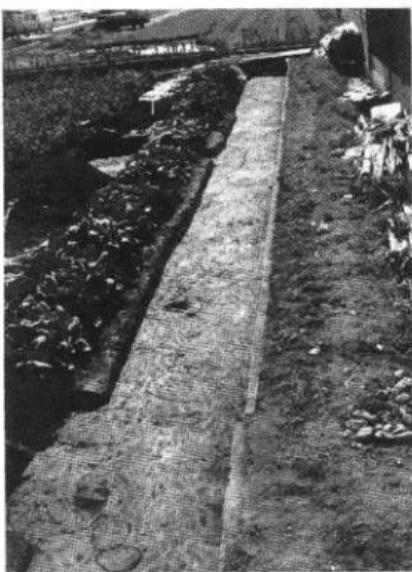


調査区遺構検出状況（南から）



調査区遺構完堀状況（南から）

田村（荒堀）地区



調査区南部遺構検出状況（北から）

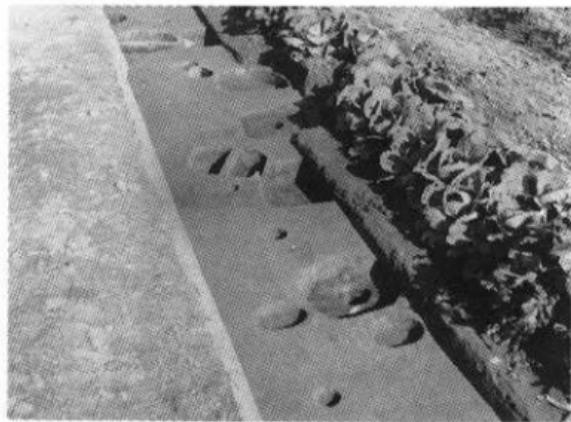


S T - 0 2 検出状況（西から）

田村（荒堀）地区



調査区北部遭構検出状況（南西から）



S B - 0 1 （南西から）

田村（荒堀）地区



調査区北端 ST-01 (南西から)



SD-01 (西から)

田村（荒堀）地区

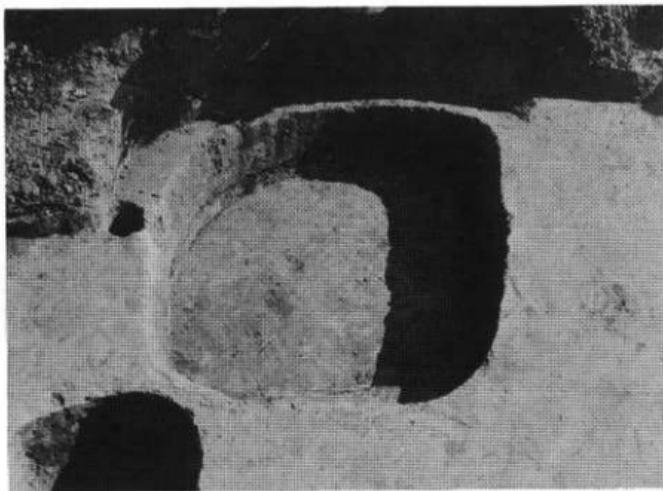


SK-01・02 (南西から)



SB-01 柱穴① (西から)

田村(荒堀)地区



S B - 0 1 柱穴③ (西から)



S K - 0 3 (南東から)

田村(荒堀)地区



SK-03 (南西から)



SB-01 柱穴② (西から)

田村(荒堀)地区



SB-01 柱穴③ (西から)



SB-01 柱穴④ (西から)

田村(荒堀)地区



S 8-01 柱穴⑤ (南西から)



S 8-01 柱穴⑥ (西から)

田村(荒堀)地区



S X - 0 2 (東から)

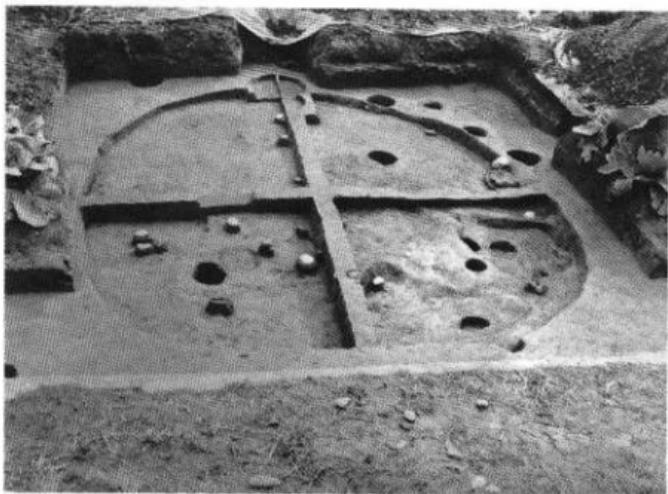


S D - 0 2 (北から)

田村（荒堀）地区



ST-02 検出状況（西から）

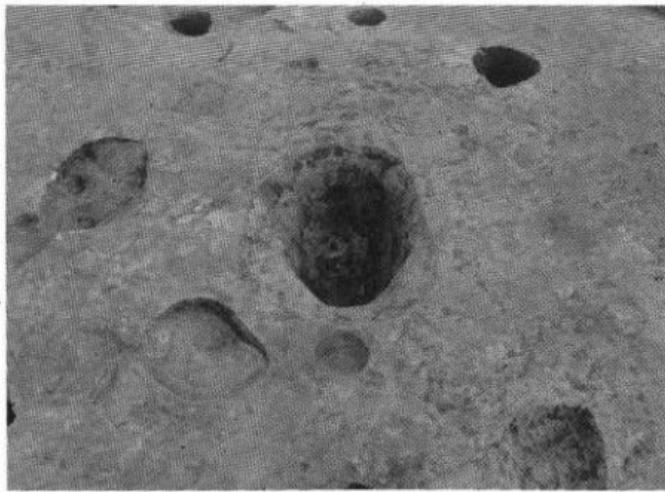


ST-02 遺物出土状況（西から）

田村（荒堀）地区



ST-02 住居跡内遺構検出状況（西から）

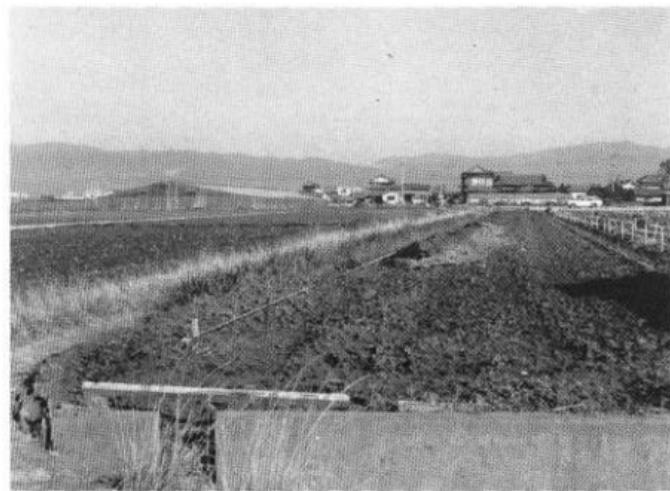


ST-02 (住居跡内・炉検出状況) (西から)

田村（荒堀）地区



調査区 トレンチ設定状況 (南から)



調査区 遠景 (南東から)

田村(神母ノ木・青木)地区